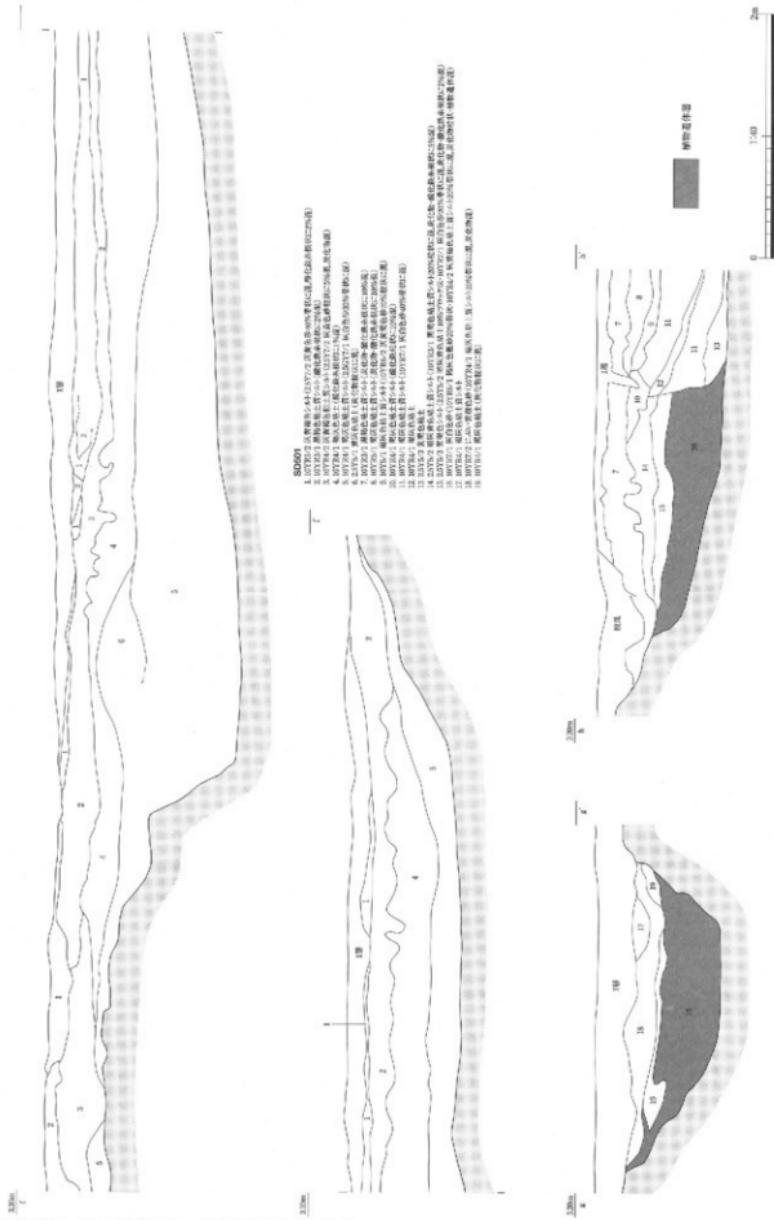


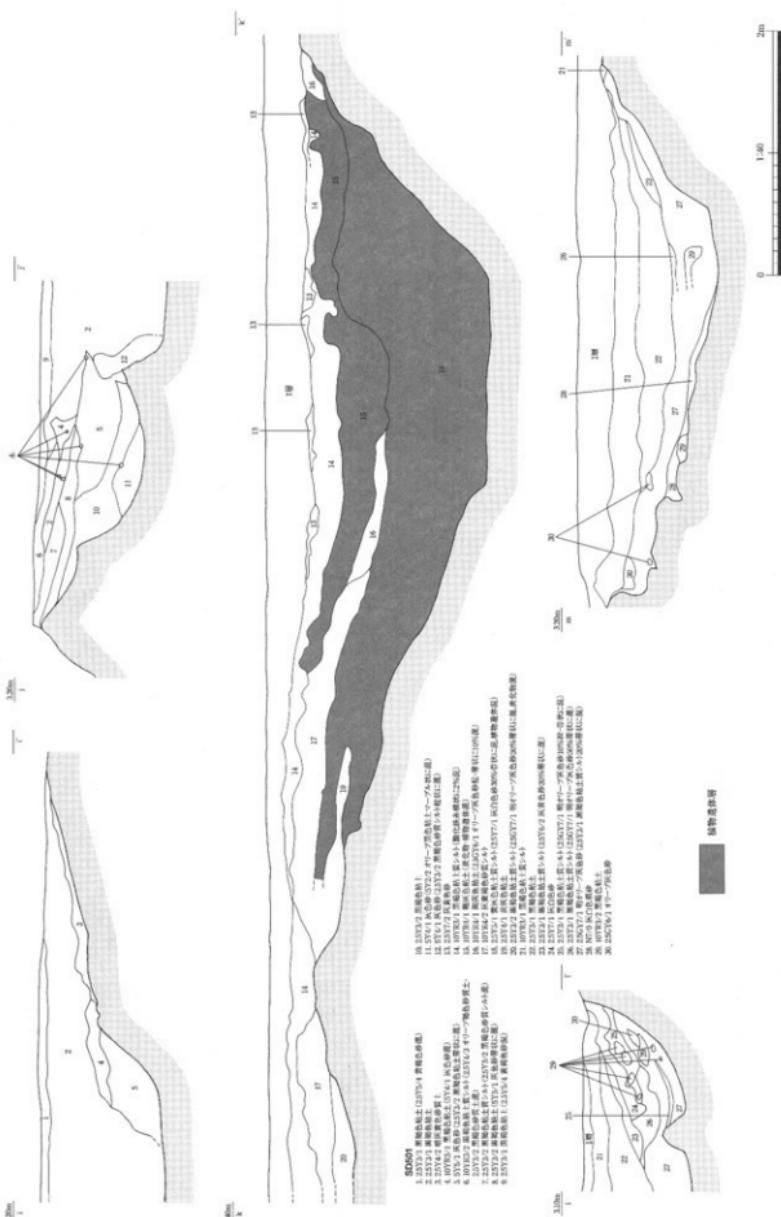
第237図 大野江淵遺跡 弥生時代遺構実測図
SD501



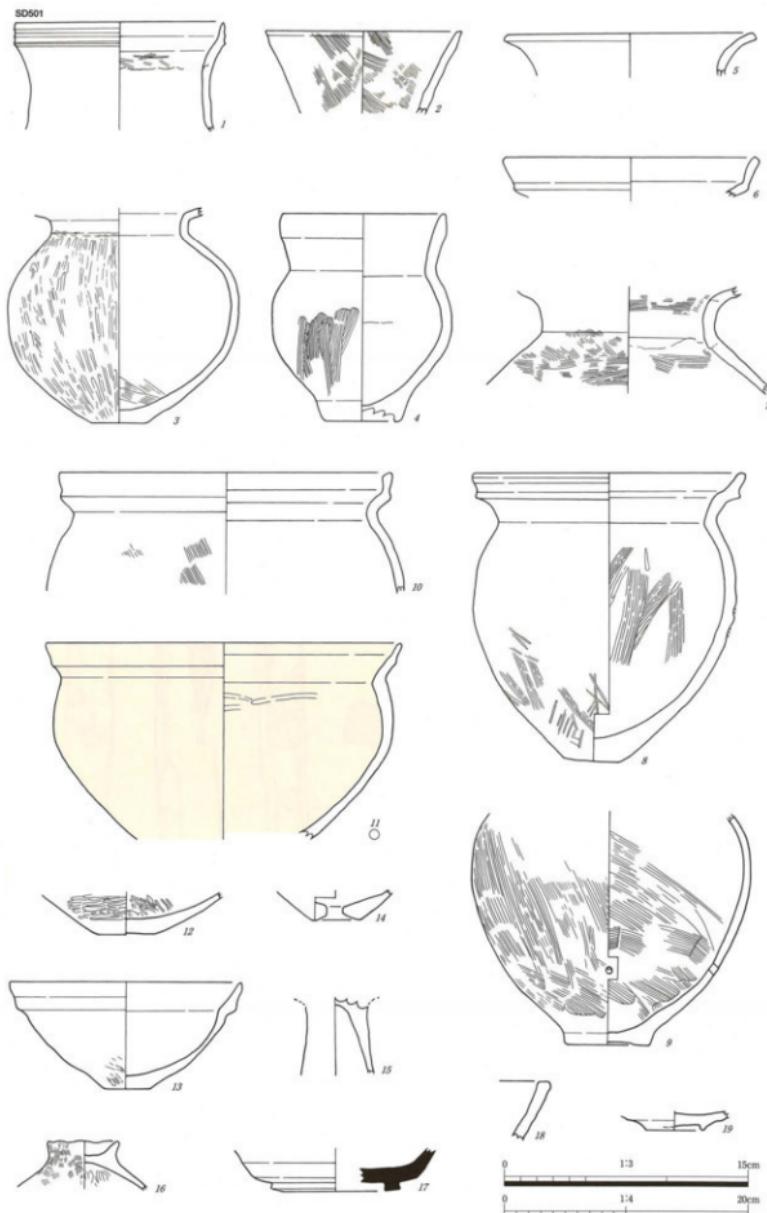
第238図 大野江遺跡 弥生時代遺構実測図
SD501



第239図 大野江洞遺跡 弥生時代遺構実測図
SD501

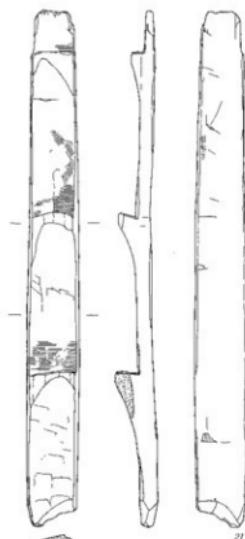
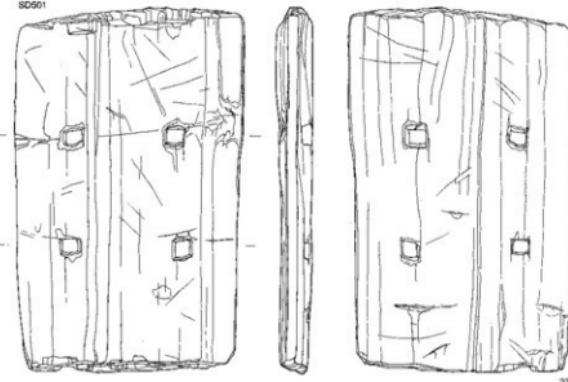


第240図 大野江瀬遺跡 弥生時代遺構実測図
SD501



第241図 大野江瀬遺跡 遺物実測図 土器・陶磁器 (1~17・19 1/3, 18 1/4)
SD501

SD501

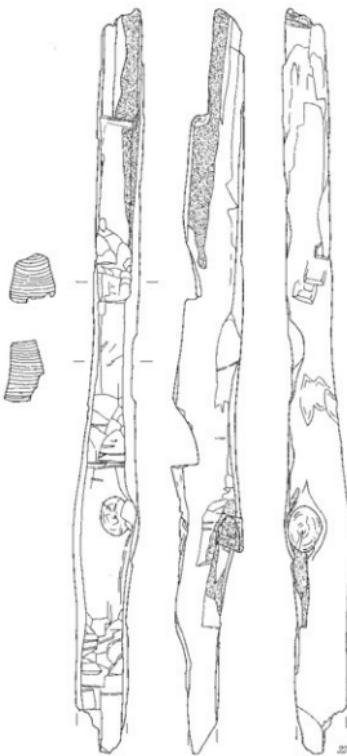


0

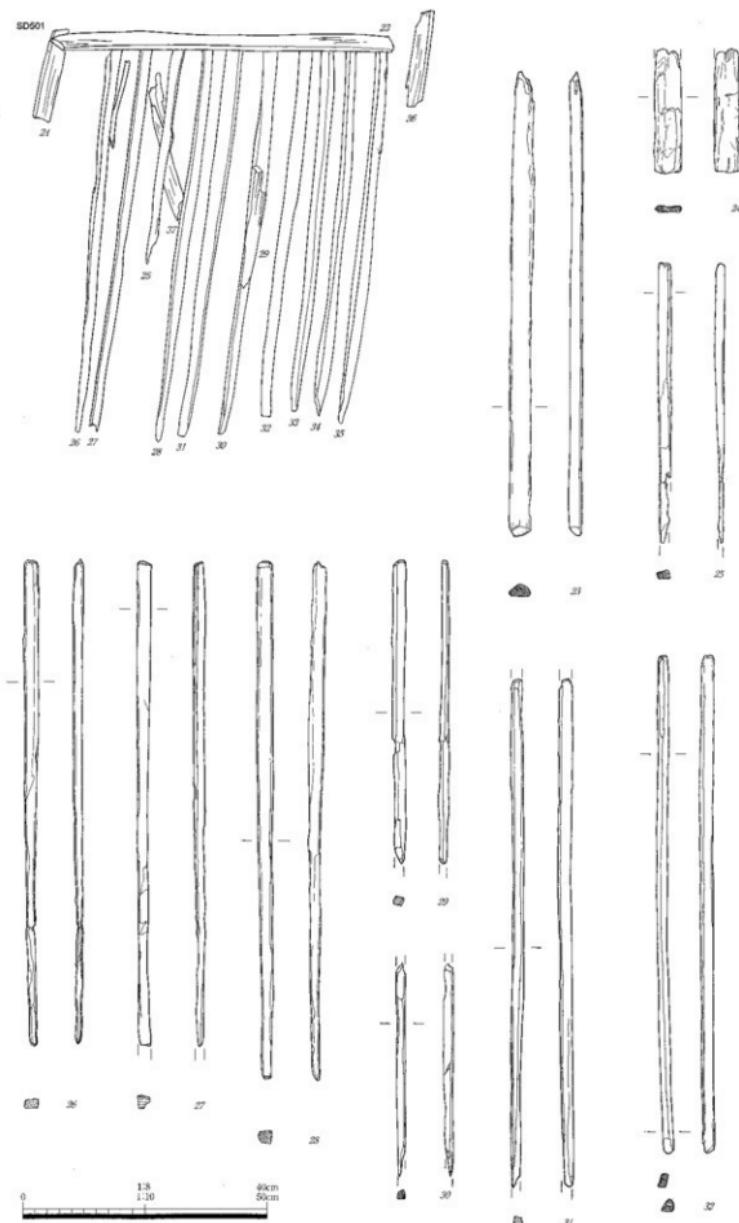
10cm

20cm

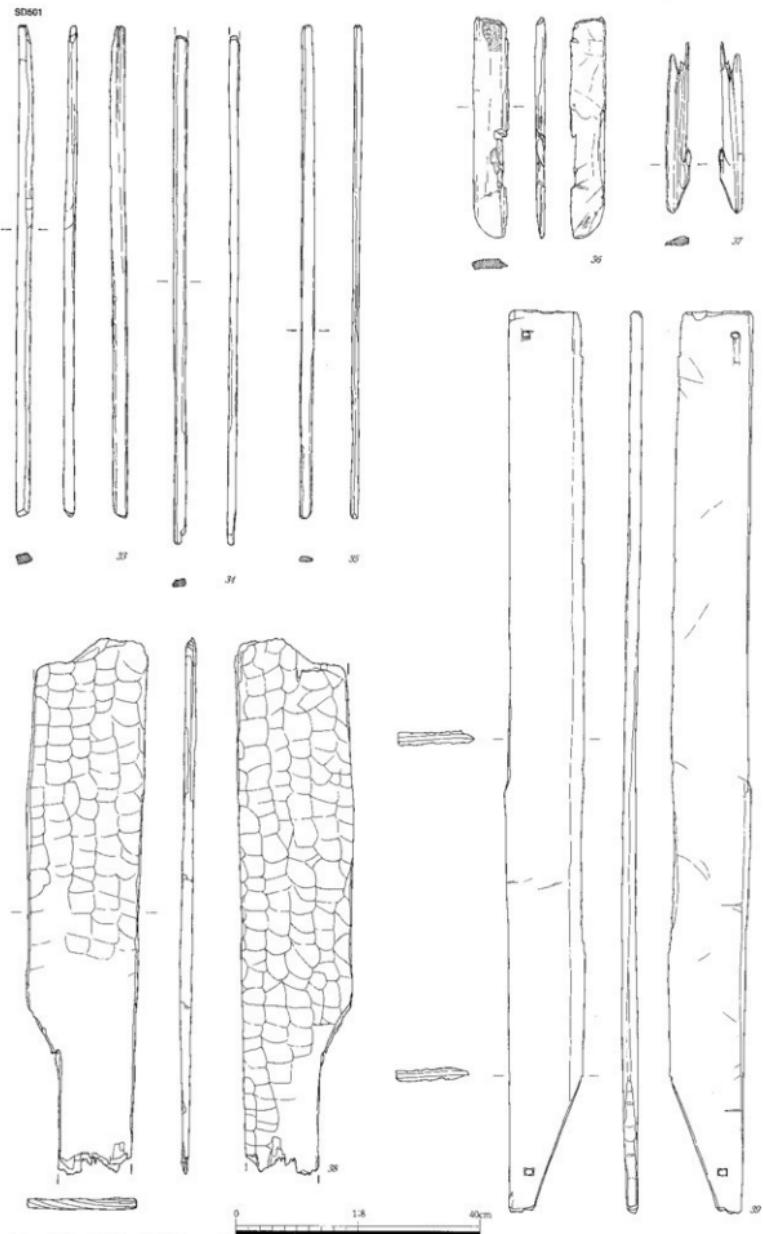
30cm

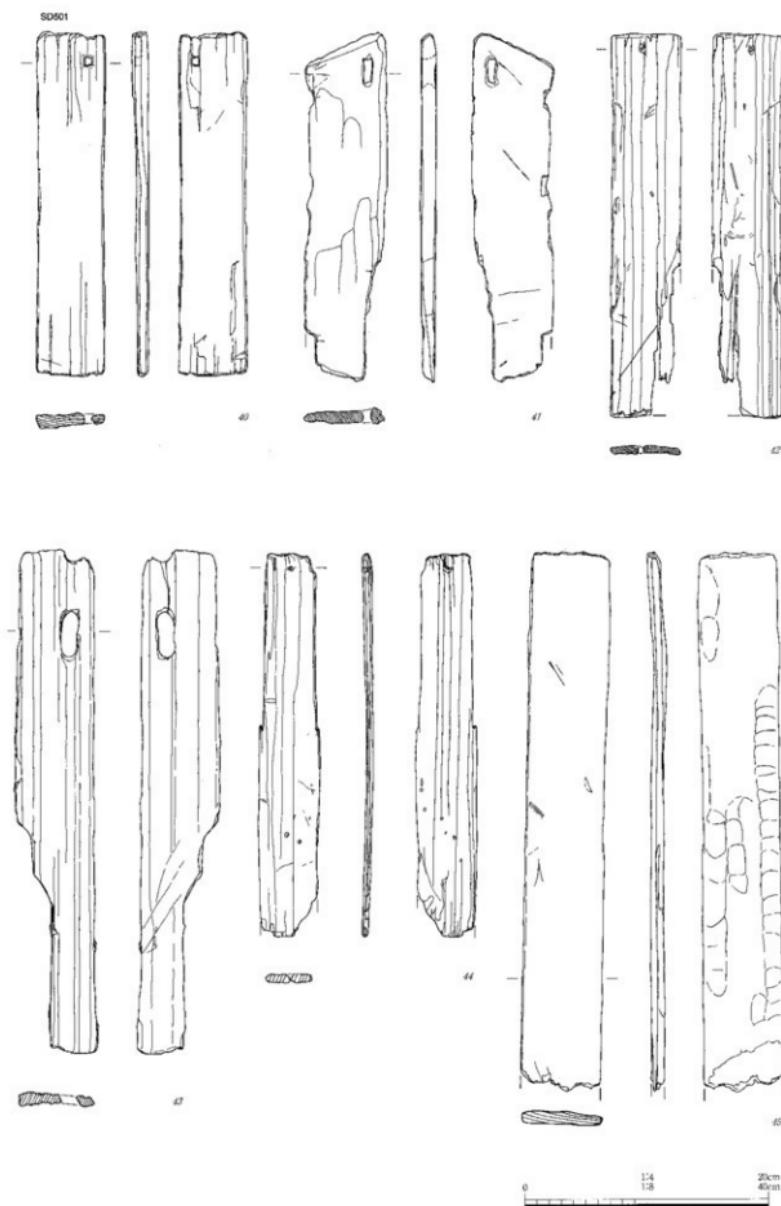


第242図 大野江淵遺跡 遺物実測図 木製品 (20 1/4, 21・22 1/8)
SD501

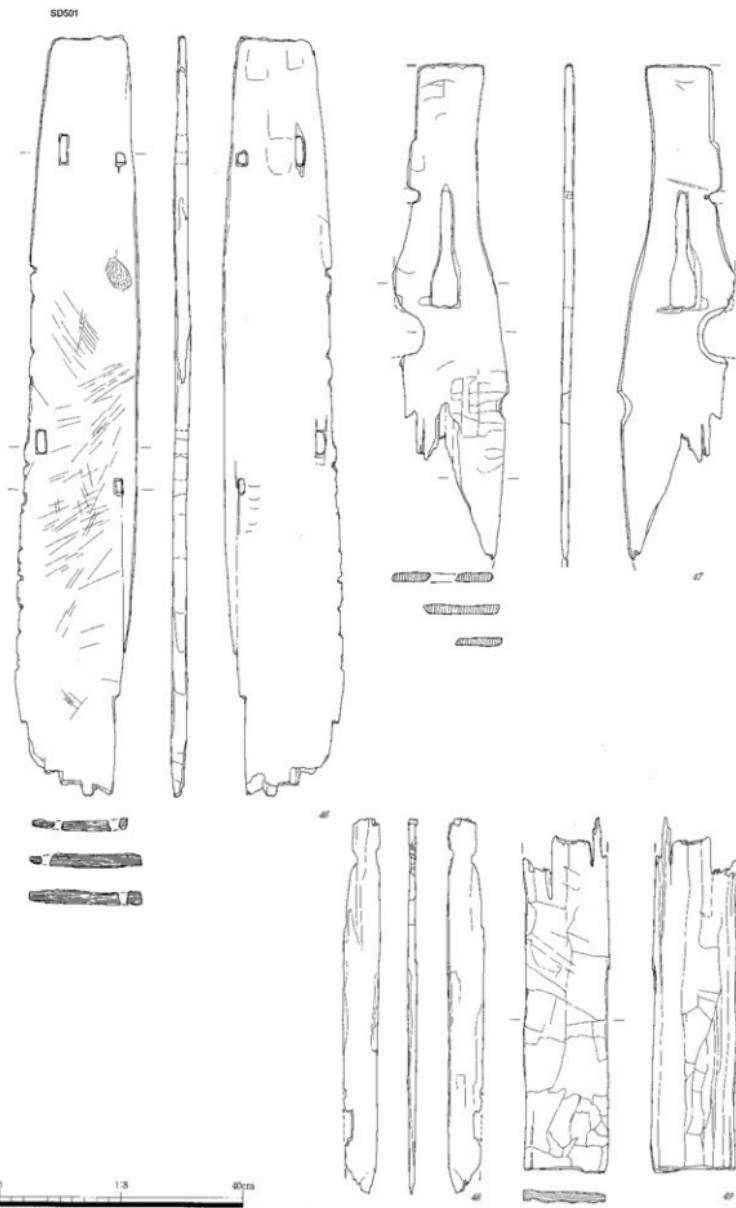


第243図 大野江淵遺跡 遺物実測図 木製品 (23~32 1/8, 全体図 1/10)
SD501

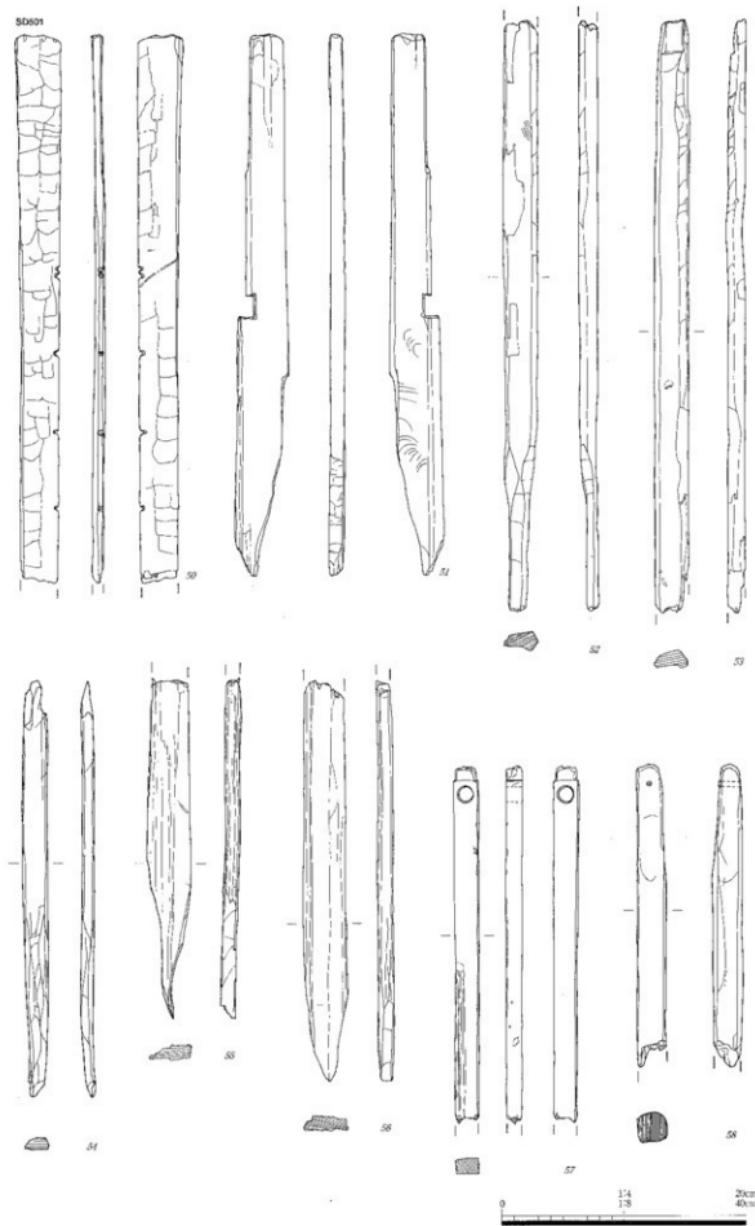




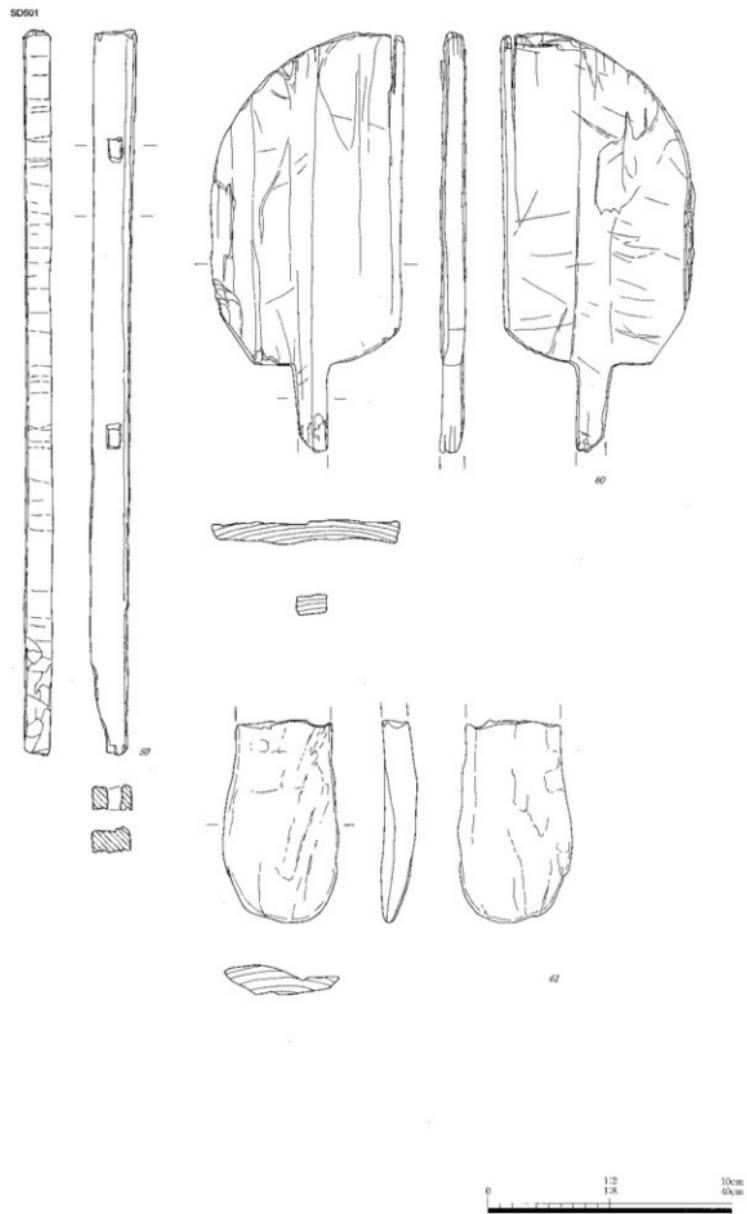
第245図 大野江瀬遺跡 遺物実測図 木製品 (42~44 1/4, 40·41·45 1/8)
SD501



第246図 大野江洞遺跡 遺物実測図 木製品 (1/8)
SD501



第247図 大野江洞遺跡 遺物実測図 木製品 (58 1/4, 59~57 1/8)
SD501



第248図 大野江洞遺跡 遺物実測図 木製品 (60・61 1/2, 59 1/8)
SD501

(2) 中近世

中世～近世の遺構は溜池・溝・土坑・道路状遺構であり、近代まで存続した遺構としてはB2・C地区で検出した溝S D601がある。遺物は珠洲・越中瀬戸・伊万里などの土器・陶磁器、木製品（漆器椀）などがあるが、遺構から出土した遺物は少ない。

A 溜池

51号溜池（SG51、第249図）

A1地区北東部に位置し、SG52に隣接する。平面形は不整形で、北側は調査区外に延びる。深さ82cmで、断面は擂鉢状を呈する。埋土は上層に暗灰黄色砂質シルト・黒褐色シルト、中層に植物遺体が混じる黒褐色粘土、下層に暗灰黄色砂がレンズ状に重なる滲水性の堆積である。切り合いでSD301・SD302を切る。出土遺物は土製品小片が1点である。

52号溜池（SG52、第249図）

A1地区北東部に位置し、SG51・SG53に隣接する。平面形は楕円形で、長径4.06m、短軸3.12m、深さ60cmである。調査時の湧水が著しかった。埋土は灰色砂がブロック状に混じる黒褐色粘土質シルトの単層である。切り合いでSD10を切るが、SD10によってA2地区的近世の溜池であるSG410と連結し、水を貯留していた溜池と推定する。出土遺物は砾石が1点である。

53号溜池（SG53、第249図）

A1地区北東部に位置し、SG52に隣接する。平面形は不整形で、長軸6.16m、短軸2.66m、深さ76cmである。断面は擂鉢状を呈し、埋土は黒褐色粘土質シルト・黒褐色粘土の水平堆積で、暗灰黄色砂がブロック状に混じる。切り合いでSD5・SD301・SD302を切るが、SD5によってSG191と連結し、同時期に機能していた可能性がある。出土遺物は土師器小片2点である。

191号溜池（SG191、第250・251図、図版138）

A1地区中央に位置する。平面形は不整形で、長軸7.64m、短軸5.04m、深さ1.2mである。埋土は上層が黒褐色粘土を基調とし、下層に暗灰黄色砂・暗オリーブ褐色粘土が堆積する。上下層の間に、オリーブ黒色粘土・暗オリーブ褐色粘土を基調とする植物遺体層がレンズ状に入り込む滲水性の堆積である。切り合いでSD5を切るが、SD5によってSG53と連結して同時期に機能していた可能性がある。出土遺物はない。

200号溜池（SG200、第250・251・283図、図版138・145）

A1地区中央南側に位置する。平面形は不整形で、長軸15.4m、短軸8.96m、深さ94cmである。埋土は黒褐色粘土・黒褐色粘土質シルトが水平堆積する。切り合いでSD4より新しいが、連結して同時期に機能していた可能性がある。

出土遺物は、珠洲擂鉢2点(62・63)、唐津擂鉢1点、骨である。62は口径24cmに復元される。内面にススが付着し、口縁部は方頭で端面が外傾する。II期に比定され、13世紀前半のものである。63は底部である。やや幅広の櫛歯原体で卸目が施され、外底面には板状圧痕が残る。骨はヒトの右大腸骨骨体および破片で、成人骨と考えられる³⁵。

201号溜池（SG201、第250・251・283図、図版138・144）

A1地区南西部に位置する。平面形は不整形で、長軸10.44m、短軸3.2m、深さ84cmである。断面は擂鉢状を呈する。埋土は上層が黒褐色粘土を基調とし、下層はオリーブ黒色粘土・灰色砂等の植物遺体が混じる層が堆積する。切り合いでSD5を切るが、SD5によってSG191と連結していた可能性がある。出土遺物は須恵器甕1点(64)、珠洲甕1点である。

400号溜池（S G400, 第252~254・283図, 図版138・144）

A 2地区東側北端に位置する。平面形は不整形で、北側が調査区外に延びるため、全容は不明である。短軸3.4m, 深さ41cmである。埋土は上層に暗灰黄色細砂・灰黃褐色砂質シルト、中層に植物遺体が混じる黒褐色粘土質シルト、下層に黒褐色粘土質シルト・オリーブ褐色粘土質シルトがレンズ状に重なる滲水性の堆積である。SD402によって南側に隣接するSG403とつながる。下層から採取した草本植物遺体の放射性炭素年代の測定結果は15世紀末から17世紀前半である⁶⁶。

S G400・SG403・SG405・SG407は、出土した遺物の時期やその放射性炭素年代測定の結果が、概ね15世紀末から17世紀前半の時期におさまる。切り合いから、埋没時期には多少の前後が考えられるが、それぞれの間を短い陸橋状の浅い溝がつなぎ、南北に連なってほぼ同時期に機能していた一連の遺構と考えられる。

出土遺物は須恵器2点（65・66）、漆器1点（67）である。65は須恵器の有台杯である。上層から出土した。高台が低くほぼ垂直に付く。66は須恵器の杯で、口径13.0cmに復元される。内外面ロクロナデを施し、底部は回転ヘラ切りである。埋土上層から出土したが、同一個体の破片が包含層で出土している。67は漆器椀である。内面に赤色漆（未同定）、外面に黒色漆（未同定）を施す。長脚高台を特徴とする合鹿椀タイプで、器面の一部に赤色漆絵痕が認められるが、意匠は不明である。

403号溜池（S G403, 第252~254・283図, 図版138・154）

A 2地区東側に位置する。平面形は梢円形で、長径4m、短径3.32m、深さ51cmである。埋土は上層は灰黃褐色砂質シルトで、下層は黒褐色粘土質シルトが堆積し、上下層の間に植物遺体が混じる黒褐色粘土質シルトが堆積する。切り合いで、SD402との切り合いではなくSD404を切るが、埋没時期の違いで、同じ時期に機能していたと考えられる。

出土遺物は漆器椀1点（68）で、下層の底面付近から出土した。大ぶりで長脚高台を特徴とする合鹿椀タイプで、内面赤色（朱）漆、外面黒色系漆である。材質はブナで、ヨコ木（柾目）取りである。下地は炭粉渋下地である。16世紀から17世紀のものと推定される⁶⁷。

405号溜池（S G405, 第252~254・283図, 図版138・146）

A 2地区東側に位置する。平面形は梢円形で、長径8.48m、短径3.62m、深さ76cmである。埋土は灰黃褐色砂質シルト・黒褐色粘土質シルト等を基調とする土に、植物遺体が混じる薄い粘土層が幾重にも入り込み、頻繁に水の動きがあったことが推測される。短い溝を介して南北に接するSG403やSG407が滲水性の堆積を示すことから、両者をつなぐ用水路としての機能も考えられる。SD404によって北側に隣接するSG403とつながり、SD406によって南側に隣接するSG407とつながる。下層から採取した草本植物遺体の放射性炭素年代の測定結果は15世紀末から17世紀前半である⁶⁸。

出土遺物は中世土師器1点（69）、漆器1点（70）で、いずれも下層から出土した。69は中世土師器の皿である。口径9.1cm、器高1.9cmで、口縁部に一段のヨコナデを施し、端部は上方へ小さく摘む。内外面とも黒変する。15世紀後半から16世紀のものである。70は漆器椀である。底部から斜め上方に立ち上がる大ぶりの総黒色系椀である。高台は欠損する。内外面に赤色（ベンガラ）漆絵痕が認められるが、意匠は不明である。材質はブナで、ヨコ木（柾目）取りである。下地は炭粉渋下地である。放射線年代測定の結果、15世紀後半から17世紀前半のものとされている^{67・68}。

407号溜池（S G407, 第252~254図, 図版138）

A 2地区東側に位置する。平面形は梢円形で、長径8.62m、短径3.38m、深さ80cmである。埋土は上層に灰黃褐色砂質シルトが堆積し、中層に植物遺体が混じる黒褐色砂質シルト・黒褐色粘土質シルト

注6 第二分量：自然科学发展 パリ・サーグイ株式会社、「太郎江遺跡の(?)粘土分析」

注7 第三分量：自然科学发展 奈良文化財研究所、「人跡川遺跡出土漆器の科学分析」

注8 第三分量：自然科学发展 株式会社加藤昌分析研究所、「太郎江遺跡出土木製品の放射性炭素年代測定」

ト等が、下層に褐色粘土質シルトがレンズ状に薄く重なって堆積する。切り合いでS D406を切るため、S D406が先に埋没したと考えられるが、同時に機能しS D406によって北側のS G405とつながっていたと推測する。出土遺物はない。

408号溜池（S G408、第252・255図、図版138）

A 2地区東側に位置する。平面形は楕円形で、長径8.28m、短径3.32m、深さ80cmである。埋土は上層に灰黄褐色細砂、中層に植物遺体が混じる灰色細砂、下層に暗オリーブ褐色粘土質シルト・灰色砂がレンズ状に重なり、滲水性の堆積である。S G408につながる溝はなく、湧水と天水によって水を貯留していたと考えられる。下層から採取した草本植物遺体の放射性炭素年代の測定結果は、15世紀中頃から17世紀前半で、上層から採取したものは16世紀初頭から17世紀中頃であった¹⁰⁹。このことから遺構の開削は早くとも15世紀中頃で、遅くとも17世紀の中頃には埋没しつつあったか、もしくは埋没していたと推測される。出土遺物はない。

409号溜池（S G409、第252・255・256・283図、図版138・147・148・154・156）

A 2地区南東部に位置し、S G410に隣接する。平面形は不整形で、遺構の南側が調査区外に延びるため全容は不明であるが、確認した部分で長軸13.72m、短軸5.32m、深さ60cmである。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする土が2層に分かれる水平堆積である。S G410との切り合ではなく、埋土も同じ様相で、同時に埋没したと考えられる。出土遺物から、S G407やS G408など近辺の溜池よりやや時代が下って、16世紀末以降に開削され、18世紀後半まで存続したものと考えられる。

出土遺物は、土器小片1点、越中瀬戸2点、唐津2点、伊万里皿2点、漆器1点、円形板1点、棒材、板材、煙管1点、種実（スモモ）1点である。⁷¹は越中瀬戸の皿で、口径10.9cmに復元される。口縁端部は外反し、灰釉が施される。16世紀末から17世紀のものである。⁷²は唐津の皿で、底径4.6cmである。内面に銅錫釉を施し、内底面を蛇の目釉剥ぎする。外底面は露胎する。17世紀後半から18世紀前半にかけての内野山窯のものと考えられる。⁷³・⁷⁴は伊万里の皿である。⁷³は口径13.9cmの陶胎染付の皿で17世紀中頃のものである。⁷⁴は脚付の皿で底径8.4cmである。脚は三脚と推定される。見込みに虫の文様の染付を施す。底部には鉄漿が付着し、チャツ痕が残る。17世紀中頃のものである。⁷⁵は漆器碗である。⁷⁶は円形板である。直径4.1cm、厚さ0.6cmの小型品で、側面に木釘が残る。放射性炭素年代の測定結果は18世紀後半である¹¹⁰。⁷⁷は煙管の吸口である。外面は塗金し、貼り合わせ部分に針状の突起がみられる。

410号溜池（S G410、第252・255・256図、図版138）

A 2地区南東部に位置し、S G409に隣接する。平面形は不整形で、遺構の南側が調査区外に延びるため全容は不明であるが、確認した部分で長軸5.68m、短軸5.08m、深さ76cmである。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする土が3層に分かれる水平堆積である。S G409と切り合ではなく、同時に埋没したと考えられる。S D10によってA 1地区のS G52とつながり、S G52・S G409・S G410で相互に機能する一連の遺構であったと推定される。出土遺物は弥生土器小片、須恵器壺小片、不明陶器が各1点である。

（泉 英樹）

507号溜池（S G507、第257図）

B 1地区南西に位置し、東西方向に長径を持つ楕円形の溜池である。S G517と東西方向に直線上に並び、S D508を切る。規模は長径14.6m、短径3.8m、深さは約1mで湧水点に達している。埋土は上層から順に暗オリーブ褐色砂質シルト、灰黄褐色粘土、オリーブ黒色粘土、黒褐色粘土をそれぞれ基調としている。その間に植物遺体が多量に混じる暗褐色粘土・灰オリーブ色粘土が2~8cm幅の

注9 第二分冊 自然科學分析 パリノ・サ・ヴュイ株式会社「大野江瀬遺跡の自然科學分析」

注10 第二分冊 自然科學分析 株式会社加藤部分析研究所「大野江瀬遺跡出土器物の放射性炭素年代測定」

帶状に挾まれていること、断面が擂鉢状を呈し、埋土がレンズ状に重なることから滲水性の自然堆積であると考えられる。地区が異なるため確実ではないが、当遺構とつながる溝 S D508は A 2 地区北端に位置する溜池 S G400にむかって延びており、A 2 地区北に位置する連結した溜池群とつながっていた可能性もある。その場合、貯水に関して相互補完的であると考えられる連結した溜池群のなかでも比較的深く掘削され湧水点に達している当遺構は主要な水源としての役割を果たしたと考えられる。ただ A 2 地区の連結する溜池群と方向が大きく異なっていること、S D508が比較的浅い溝であり、埋土も人為的に埋められた可能性が高いことから、連結していた期間は一時的な送水の間だけであったと考えられる。遺構の詳細な存続時期は遺物が出土していないため不明であるが、連結していた可能性が高い A 2 地区の溜池群のうち、S G405下層から採取した草本植物遺体・出土した木製品の放射性炭素年代の測定結果がともに15世紀後半～17世紀前半におさまることから、当遺構の時期もそれに準じる可能性が高い。出土遺物はない。

517号溜池（S G517、第258図、図版139）

B 1 地区南に位置し、東西方向に長径を持つ橢円形の溜池である。S G507と東西方向に直線上に並び、S D518・S D531を切る。規模は長径14.7m、短径4 m、深さは約1 mで湧水点に達し、断面は擂鉢状を呈する。埋土の堆積状況は遺構の東西で大きく異なり、西側は上層が黒褐色粘土、次いで地山である灰色砂をそれぞれ基調としているが、東側は上層が黄灰色粘土質シルト、次いで黄灰色粘土がレンズ状に重なる。一方、最下層の埋土は共通しており、オリーブ黒色粘土が薄いレンズ状に堆積している。以上のことから、基本的には滲水性の自然堆積であるが、東側の埋土堆積には当遺構とつながる溝 S D518・S D531から水とともに流入した土砂の影響があった可能性が考えられる。出土遺物はない。

528号溜池（S G528、第258図）

B 1 地区東端に位置する溜池である。遺構の東側が調査区外に広がるため、平面形の全容は不明である。調査区内での規模は長軸5.3m、短軸4.8m、深さは1.26mで湧水点に達する。また断面は擂鉢状を呈し、レンズ状に堆積する滲水性の自然堆積である。埋土は上層から順に暗オリーブ褐色粘土質シルト、暗灰黄色粘土質シルト、黒褐色粘土を基調とし、下層はオリーブ黒色粘土が帶状に混じる灰色砂、最下層には黒褐色砂質シルトと地山の砂がマーブル状に混じる。以上のことから、開削からしばらくの間は頻繁に水の動きがあったこと、開口状態で放棄されたのち、ゆっくりと埋没していったことが推定できる。遺物は中～下層埋土から珠洲甕の体部片1点と須恵器の体部片1点が出土しているが小片である。上層埋土からは近代磁器皿の底部～体部片1点が出土しているが、これは近代以降、窪地として残っていたところに暗オリーブ褐色粘土質シルトなどの土砂と共に流入したものと考えられる。

545号溜池（S G545、第271・272図、図版139）

B 1 地区北端に位置し、東西方向に長径を持つ橢円形の溜池である。S D503を切る。規模は長径9.5m、短径4 m、深さは91cmで湧水点に達する。また断面は擂鉢状を呈し、褐灰色粘土質シルト、にぶい黄褐色砂、灰色砂からなる埋土は混合率により何層かに分かれ、最下層は褐灰色粘土質シルトに灰色砂が帶状に混じる水成堆積層となっている。また埋土はレンズ状に重なる自然堆積である。出土遺物はない。

613号溜池（S G613、第259・274図、図版139）

B 2 地区南に位置し、東西方向に長径を持つ橢円形の溜池である。S D612を切る。規模は長径

10.8m、短径4m、深さ89cmを測る。また断面は擂鉢状を呈し、埋土は上層からオリーブ褐色砂質シルト、黄灰色砂質土、下層に2~8cm幅の灰オリーブ色粘土層を2条帯状に挟む黒褐色粘土であり、レンズ状に堆積している。以上のことから、滲水性の自然堆積であることが推定できる。また当遺構とつながる溝S D612は東西に延び、西側でS G620に、東側でC地区のS G722と連結する。出土遺物はない。

620号溜池（S G620、第274・275図）

B2地区南西に位置する溜池である。西側が調査区外に広がるため平面形の全容は不明である。S D602・S D612を切り、近代の溝S D601に切られる。調査区内での規模は長軸6.2m、短軸4.16m、深さ1.16mを測る。断面は擂鉢状を呈し、埋土は黒褐色粘土、暗灰黄色砂、灰白色粗砂などからなり、混合率により何層かに分けられる。また埋土はレンズ状に堆積する自然堆積である。当遺構とつながるS D612・S D602は東へ延び、S D612によってS G613・S G722と、S D602によってS G728と連結していたと推測する。出土遺物はない。

707号溜池（S G707、第260・261図、図版139）

C地区南に位置し、東西方向に長径を持つ楕円形の溜池である。S D501を切り、S G713とは端部が重なる。規模は長径8.6m、短径3.2m、深さ70cmを測る。上層が黒褐色砂質シルト、灰黄褐色砂質シルトを基調とする埋土、下層が黄灰色粘土質シルトを基調とする埋土からなり、上層と下層の間に植物遺体を含む2~6cm幅の黒褐色粘土質シルトが帶状に混じる。また最下層の埋土は黄灰色粘土質シルトが帶状に混じった灰色細砂であり、滲水性の自然堆積の特徴を示している。遺物は砾石が1点出土している。

713号溜池（S G713、第260・261図、図版139）

C地区南に位置し、南北方向に長径を持つ楕円形の溜池である。S G714と東西方向で約5mの幅をあけて平行に並び、S G707とは端部が重なる。遺構の東側は調査区外に広がっており、調査区内での規模は長径8.8m、短径3.5m、深さ80cmを測る。埋土は上層が黒褐色砂質シルト、下層は黄灰色粘土質シルトを基調とし、その間に植物遺体を含む2~6cm幅の黒褐色粘土質シルトが帶状に混じる滲水性の自然堆積である。S G707とS G713は、埋土の種類および堆積状況が共通すること、切り合いか不明瞭であることなどから、遺構の存続時期がほぼ同じと考えられる。出土遺物はない。

714号溜池（S G714、第260・261図、図版139）

C地区南に位置し、南北方向に長径を持つ楕円形の溜池である。S G713と東西方向で約5mの幅をあけて平行に並ぶ。規模は長径8.3m、短径2.8m、深さ57cmを測る。埋土は上層が褐灰色粘土質シルトであり、下層は灰色細砂に黄灰色粘土質シルトが薄く帶状に混じる。下層部分の状況は滲水性の自然堆積の特徴を示している。また連結する溝が存在しないことから、貯水手段は天水および湧水であり、配水は周辺のごく限られた水田への給水を目的とした溜池であったと考えられる。また溜池の中でも比較的浅く、短期間使用されたものである可能性が高い。出土遺物はない。

722号溜池（S G722、第262・263・274図、図版139）

C地区北に位置し、東西方向に長径を持つ楕円形の溜池である。S D612を切り、S K726に切られる。規模は長径12.9m、短径4.9m、深さは1.1mで湧水点に達する。埋土はレンズ状に堆積し、上層が灰黄褐色砂質シルト・にぶい黄褐色細砂が混じる褐灰色粘土質シルト、次いで灰色粘土質シルトが帶状に混じる褐灰色粘土質シルトである。その間にはS G707・S G713と同様、植物遺体が多量に含まれた黒褐色粘土質シルトが帶状に混じっていることなどから、滲水性の自然堆積と考えられる。遺

物は珠洲壺の体部片が1点、上層埋土から出土している。

727号溜池（S G 727, 第264・265図, 図版139）

C地区北に位置し、南北方向に長軸を持つ楕円形の溜池である。弥生時代の自然流路 S D 501を切り、S G 728に切られる。下層部分でS K 736の一部を切るが、同時に埋没したのち再び掘削されたと考える。規模は長径5.8m、短径3.7m、深さ90cmを測る。埋土はレンズ状に重なる自然堆積であり、上層が灰褐色粘土、下層は暗灰褐色粘土質シルトを基調としている。最下層の埋土には灰色粗砂がブロック状に混じる。出土遺物はない。

728号溜池（S G 728, 第264・265・274・283図, 図版139）

C地区北に位置する不整形の溜池。S D 738を切り、溝S D 602を通じてB 2地区のS G 620と連結する。またS D 602との切り合いは不明確であり、同時期に埋没したと考える。規模は長軸8.5m、短軸5m、深さ98cmを測る。遺構の平面形態および埋土の切り合いなどから、ほぼ同じ位置で何回か再掘削が行われた可能性が高く、特にc-c'断面の東西で大きく分かれる。東側の埋土は再掘削された小型の溜池のものであり、褐灰色粘土質シルトを基調とする埋土がレンズ状に重なる自然堆積である。西側の埋土は上層から褐灰色粘土質シルト、灰白色砂と褐灰色粘土、黄灰色粘土を基調にレンズ状に重なる自然堆積である。遺物は珠洲壺の体部片2点・底部片1点(78)、鉢の体部片1点が出土している。

(朝田 要)

B 溝

4号溝（S D 4, 第266・267図, 図版140）

A 1地区の東側から南側に向かって大きく屈曲して走る溝である。最大幅は1.91mで、深さは28cmである。埋土は上層が黒褐色粘土質シルト・暗灰黄色粘土質シルト等を基調とし、下層に黒褐色粘土が堆積する。埋土は、3~4mの間隔で約20mに渡って併走するS D 5と同じ様相である。両溝間は道路として利用されていた可能性がある。S G 191周辺で南西方向に屈曲し、S G 200に切られるが、S G 200につながる用水路としての機能も考えられる。出土遺物は須恵器壺が1点あるが混入遺物と考えられる。

5号溝（S D 5, 第266・267・284図, 図版140・155）

A 1地区の東側から南西部に向かって走る溝である。最大幅は1.96mで、深さは38cmである。埋土は黒褐色粘土質シルト・暗灰黄色粘土質シルト等を基調とする。約20mに渡ってS D 4と併走するため、両溝間は道路として利用されていた可能性がある。切り合いでS G 53・S G 191・S G 201に切られるが、これらの溜池をつなぐ用水路としての機能も考えられる。

出土遺物は土師器小片2点、越中瀬戸小片2点、石鍋1点(81)である。81は滑石製石鍋の破片である。穿孔されており、温石に転用されたと考えられる。

301号溝（S D 301, 第268・279・284図, 図版140・144）

A 2地区の北西部からA 1地区の北東部へ延びる。最大幅は2.33mで、深さは40cmである。埋土は上層が黒褐色粘土質シルト、下層が褐灰色粘土質シルトを基調とする。断面はほぼ逆台形を呈する。S D 302と、途中で方向を変えながら、1~2mの間隔で約60mに渡って併走する。両溝間の土が硬く締まっていることから、道路の側溝として機能していたと推定される。

出土遺物は須恵器杯2点(82)、須恵器杯蓋1点、土師器小片数点、越中瀬戸擂鉢1点(83)、板材1点である。82は須恵器の立ち上がりのある杯である。外面全体にヘラケズリを施す。端部は欠損するが、器高が浅く小型で、7世紀前半のものである。83は越中瀬戸の擂鉢である。内外面に錆釉を施

し、内面には創口が残る。16世紀末から17世紀のものである。

302号溝（S D302、第268図、図版140）

A2地区の北西部からA1地区の北東部へ延びる溝で、S D301と併走する。道路の側溝と推定される。最大幅は2.2mで、深さは24cmである。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。断面はほぼ逆台形を呈する。出土遺物はない。

303号溝（S D303、第268図、図版140）

A2地区の中央南側でS D302から分岐し、調査区南端まで併走する。最大幅は84cmで、深さは16cmである。断面はほぼ逆台形を呈し、埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。S D302の付け替えかと考えられる。出土遺物はない。

304号溝（S D304、第268図、図版140）

A2地区の中央南端でS D301から分岐する。最大幅は1.21m、深さ18cmで、断面は逆台形を呈する。埋土は上層が黒褐色粘土質シルトで、下層が褐灰色粘土質シルトである。全容は不明であるが、南側に隣接するA1地区で遺構の続きが検出されていないため、S D301が一部分で枝分かれした一連の遺構であると推測する。出土遺物はない。

308号溝（S D308、第269図、図版140）

A2地区の北側を東西方向にS D309と併走する。最大幅は50cmで、深さは4cmと浅い。埋土はにぶい黄褐色砂が粒状に混じる褐灰色粘土質シルトである。S D309と約5mの間隔で併走し、道路の側溝の可能性があるが、削平を受けており、検出できた長さが短いため詳細は不明である。切り合いでS K310に切られる。出土遺物はない。

309号溝（S D309、第269図、図版140）

A2地区の北側を東西方向にS D308と併走する。最大幅は70cmで、深さは8cmと浅い。埋土はにぶい黄褐色砂が粒状に混じる褐灰色粘土質シルトである。西端は近現代のものと思われる攪乱に切られ、東端をS D350に切られる。出土遺物はない。

350号溝（S D350、第268・270図、図版140）

A2地区中央を南北にはば直線的に走る。北端は調査区外へ延びるが、北に隣接するB1地区では遺構の続きは検出されていない。最大幅は94cmで、深さは22cmである。埋土は黒褐色粘土質シルト・褐灰色粘土・灰黃褐色粘土質シルト等を基調とし、地山のにぶい黄褐色砂が粒状に混じる。切り合いでS D309を切り、S D303に切られる。出土遺物はない。

380号溝（S D380、第270図、図版140）

A2地区中央を南北に走る。最大幅は73cmで、深さは27cmである。埋土は黒色粘土・褐灰色粘土質シルト等を基調とする。切り合いでS K381に切られる。出土遺物はない。

402号溝（S D402、第252~254図、図版138）

A2地区の西側に位置し、S G400とS G403を連結する陸橋状の浅く短い溝である。最大幅は91cmで、深さは20cmである。埋土は灰黃褐色砂質シルト・褐灰色粘土質シルトである。出土遺物はない。

404号溝（S D404、第252~254図、図版138）

A2地区の西側に位置し、S G403とS G405を連結する陸橋状の浅く短い溝である。最大幅は87cmで、深さは14cmである。埋土は植物遺体が混じる暗灰黄色粘土質シルト・黒褐色粘土質シルトである。切り合いで北側をS G403に切られるが時期差はないと考えられる。出土遺物はない。

406号溝（S D406, 第252・253図, 図版138）

A 2 地区の西側に位置し, S G405とS G407を連結する陸橋状の浅く短い溝である。最大幅は1.8mで, 深さは20cmである。埋土は灰黄褐色砂質シルトを基調とする。切り合いで南側をS G407に切られるが時期差はないと考えられる。出土遺物はない。

(泉 英樹)

502号溝（S D502, 第236・271・272・284図, 図版141・148）

B 1 地区北側に位置し, 東西方向に直線的に流れる溝で, 両端が調査区外に延びる。S D501を切る。直線上に位置するC地区に溝が延びていないことから, B 1 地区・C地区の間に端部があるか, 南北に曲がっていた可能性がある。規模は最大幅6.1m, 最深部92cmを測る。埋土は上層が褐灰色粘土質シルト, 下層は黒褐色粘土質シルトを基調とする。最下層で灰色砂が帶状に混じる滲水性の自然堆積が確認できるが, 上層の埋土が粘土質上を基調としていること, 上流部分と下流部分の断面で確認できる埋土が異なること, 直線上に位置するC地区に溝が延びていないことなどから, C地区西側に位置したと考えられる下流側端部から徐々に堆積し, 上流側の埋土は水が淀んだ滲水性の状態で堆積したと考えられる。遺物は土師器の底部片1点, 須恵器壺の体部片1点, 伊万里火入れの底部片1点(84)が出土している。84は18世紀前半の陶胎染付である。

503号溝（S D503, 第271・272図）

B 1 地区北端に位置し, 東西方向に流れる溝。S G545が存続した時期に利用された溝と考えられる。S D501と重複する東西両端部分の切り合いで確認できなかった。幅1.8m, 最深部52cmを測る。埋土は黒褐色粘土を基調する単層である。遺物は土師器の体部小片1点が出土している。

504号溝（S D504, 第235・271・272・284図, 図版144）

B 1 地区の北西端に位置し, 東西方向に流れる溝。両端が調査区外に延び, B 1 地区でS D501を切り, B 2 地区でS D612・C地区でS D501を切ると考えられる。B 2 地区ではS D612との切り合いで明確には確認できないが, B 1 地区 S D501b-b'・C地区 S D501e-e' 断面の観察結果からは, S D501が埋没し微低地上になったのち早い段階でS D501上にS D504が削削され, 両遺構を覆うよう土砂が堆積したと推定できる。両遺構の上に堆積した土が残っている段階で同一遺構として検出・掘削したために, 個々の遺構の平面的な広がりを確認できず, B 2 地区西壁（S D612q-q' 断面）-B 1 地区東壁（S D501b-b' 断面）-C地区西壁（S D501e-e' 断面）-C地区東壁（S D501g-g' 断面）につながる一連の遺構であった可能性が指摘できるにとどまる。平面的な広がりを部分的に確認できたB 1 地区で, 規模は最大幅3.2m, 深さ1mを測る。埋土は上層が褐灰色粘土質シルトを基調とする粘土質上, 下層は褐灰色砂質シルト・灰白色砂に褐灰色粘土質シルトが帶状に混じる水成堆積の特徴がみられる。

遺物はB 1 地区で弥生土器の体部2点, 須恵器杯蓋1点(85), 珠洲壺の体部片2点, 珠洲鉢の体部1点・底部1点(86), 種実(モモ)などが出土しているが, 当遺構の大部分がS D501上に削削されていることや遺構上に堆積した土砂を同時に削削した可能性が否定できないことから, 出土遺物も混入したものである可能性が考えられる。85は須恵器の杯蓋で体部は中程から口縁に緩やかにのび, 端部は鋭さのない三角形が下方にのびる。8世紀のものと考えられる。86は珠洲鉢の底部片である。底部外面には静止糸切り痕がみられるが, 内面は摩耗が激しい。

508号溝（S D508, 第257・273図）

B 1 地区の南東部に位置し, 南西から北東方向に直線的に延びる溝である。最大幅70cm, 深さ18cmを測る。S D518と平行し, 南西端はA 2 地区のS G400に向かって延びる。S G400・S G507が存続

した時期に送水に利用された溝である可能性が考えられる。埋土はオリーブ黒色粘土を主とする黒色粘土・暗灰黄色粘土の混土である。溜池間を連結する溝の中でもきわめて浅く、人為的に埋められた可能性が高いことから、A 2 地区 S G 400とB 1 地区 S G 507の間の一時的な送水のために開削され、使用した後すぐに埋められた可能性が高い。出土遺物はない。

518号溝（S D518, 第273図）

B 1 地区南側に位置し、S D508と平行して直線的に延びる溝。S K525を切り、東端をS G517に切られる。S G517が存続した時期に一時的に利用された溝と考える。最大幅80cm、最深部28cmを測る。埋土はオリーブ褐色砂が混じる黒褐色粘土を基調とする。出土遺物はない。

531号溝（S D531, 第273図）

B 1 地区南西部に位置し、直線的に延びる溝。東端はS G517に切られ、西側は調査区外に延びる。S D537・S D543を切る。最大幅1.2m、深さ28cmを測り、西側からS G517に接続する東端に向かって深くなる。埋土は上層が黒褐色粘土、下層は黒褐色粘土が層状に混じる黄褐色砂であることから、開削後S G517と調査区西側との間に一時的な水の流れがあり、そのち埋め戻されることなく徐々に粘質土が堆積したと考えられる。出土遺物はない。

537号溝（S D537, 第273図）

B 1 地区南西部に位置する浅い溝で、S D531に東端を切られ、西側は調査区外に延びる。S D531に切られているために確実ではないが、S G517と接続し、一時的な送水に使用された溝の可能性が考えられる。最大幅1.24m、深さ26cmを測る。埋土は黒褐色粘土の単層である。出土遺物はない。

543号溝（S D543, 第273図）

B 1 地区南西部に位置し、東西方向に延びる浅い溝。最大幅33cm、深さ10cmを測る。東端がS D531に切られる。埋土は黒褐色粘土質シルトの単層である。出土遺物はない。

601号溝（S D601, 第284図、図版141・145・156）

B 2 地区からC 地区にかけて東西方向に直線的に延びる溝。1953年の航空写真に写っており、近代まで存続した溝である。中近世の溜池 S G620を切る。最大幅5.66m、深さ88cmを測る。出土遺物は須恵器類の体部片1点、87を含む珠洲壺の体部片が6点・鉢の口縁部片1点と体部片1点、瀬戸小壺の底部片1点、越中瀬戸壺の体部片3点と底部片1点・鉢の体部片2点、京焼風唐津の体部片3点・伊万里碗の口縁部片1点と体部片3点と底部片1点・鉢の口縁部片1点、近代磁器碗の口縁部片17点と体部片5点と底部片2点・皿の口縁部片1点と底部片1点、陶製人形1点、不明陶器片6点、近代薬瓶1点、金属製品1点（88）、種災（オニグルミ1点、トチノキ3点）などである。87は珠洲壺の体部片で、内面に押圧具痕が明瞭に残る。88は金属製品で、鉄鍋の把手と推定される。蛍光X線分析の結果、鉄製の本体に真鍮板を巻いて加工したと考えられる¹¹¹。また把手状の部分と本体部分との間に、吊り具を掛けるためと考えられる穿孔が3箇所みられる。

602号溝（S D602, 第264・274・275・281図、図版141）

B 2 地区からC 地区にかけて東西方向に直線的に延びる溝。最大幅3.88m、深さ80cmを測る。西端はS G620と連結し、東端はS G728・S G736と連結する。S K609に切られ、S D612を切る。B 2 地区西端に位置するS G620とC 地区北側中央に位置するS G728を結ぶ送水用の溝と考えられる。ただS G620-S G728間は約50m離れており、その間の溝の幅・深さ、埋土の種類・堆積状況が一律でないことなどから、溝の部分とそれに連結した溜池であった可能性がある部分に分けられる。まず溝と考えられる部分の深さはほぼ一定で平均30~40cmであり、埋土は上層が黒褐色粘土を基調とする粘

¹¹¹ 第二分冊 自然・化学分析 財団法人大英考古文化財研究会『大野江石遺跡出土遺物の蛍光X線分析』

質土、下層は黒褐色粘土が帶状に混じる灰色粗砂である。これに対し、溜池の可能性のある部分の深さは約70~80cmで湧水点に達しており、埋土は上層が黒褐色粘土や暗灰黄色粘土、下層は植物遺体が含まれた黒褐色粘土・灰黃褐色粘土を基調とする滲水性の自然堆積の特徴を持つ。B 2 地区中央のe-e'断面、S K609に切られるa-a'断面部分(第281図)がこれにあたり、この位置にS D602と連結した溜池があった可能性が考えられる。遺物は土師器の体部小片1点と近代陶磁器の体部1点、種実はオニグルミ1点、トチノキ19点などが出土している。

612号溝 (S D612, 第262・263・274~278図、図版141)

B 2 地区からC地区にかけて東西方向に延びる溝である。西側に位置するB 2 地区では、南北に枝分かれする。北側の溝は、S G613に切られ、さらに西へ延びてS D602・S G620に北肩を切られる。西端は調査区外へ延びる。南側の溝は、南へ向かったのち、ゆるく曲がって西に延びる。切り合いでS K615を切る。東側のC地区では、S G722に切られて途切れる。溝は東から西に向かって幅が広くなる。最大幅5.16m、最深部1.22mを測り、埋土は黒褐色粘土、暗灰黄色粘土、灰黄色砂などからなる。切り合いでS G613やS G722などの溜池に先行して埋没したと考えられるが、これらの溜池をつなぐ用水路として同時期に機能していた可能性もある。また、S G613以西でS D612の幅が広くなり、中洲状に高くなる部分があるのは、溝の付け替えを行ったためと推測する。

遺物は土師器の体部小片2点、珠洲甕の体部片3点・壺の体部片1点が出土している。

614号溝 (S D614, 第274・277・278図)

B 2 地区南東端に位置し、東西方向に延びる溝。S D612を切り、西端は調査区外に続く。最大幅60cm、深さ20cmを測る。埋土は暗オリーブ褐色砂質シルトを基調とする単層である。出土遺物はない。

738号溝 (S D738, 第264・265・282図)

C地区に位置し、南西→北東方向にのびる直線的な溝。西端はS G728に切られ、東端は調査区外に延びる。S K737に切られる。S G728と切り合はあるが、ほぼ同時期に連結して利用された溝であると考える。最大幅1.3m、深さ27cmを測る。埋土は褐灰色粘土質シルトを基調とする単層である。遺物は須恵器の体部小片1点が出土している。

(朝田 要)

C 土坑

2号土坑 (S K 2, 第279図)

A 1 地区東端に位置する。調査区外に延びるため平面形の全容は不明で、深さ40cmである。埋土は黒褐色粘土質シルト・黒褐色粘土が水平堆積する。出土遺物はない。

3号土坑 (S K 3, 第279図)

A 1 地区東側に位置する。平面形は楕円形で、長径1m、短径70cm、深さ22cmである。埋土は黒褐色粘土の単層である。出土遺物はない。

12号土坑 (S K 12, 第268・279図)

A 1 地区東側に位置し、S K53に隣接する。平面形は楕円形で、長径96cm、短径66cm、深さ11cmである。埋土は黒褐色粘土の単層で、切り合いで道路の側溝と考えられるS D301より新しい。出土遺物はない。

15号土坑 (S K 15, 第279図)

A 1 地区東側に位置する。平面形は不整形で、長軸2.34m、短軸94cm、深さ24cmの細長い土坑である。埋土は暗オリーブ褐色砂質シルト・黒褐色粘土を基調とする。切り合いで、S D301・S K16を切る。出土遺物は土師器甕1点である。

16号土坑（S K16, 第279図）

A 1 地区東側に位置する。平面形は不整形で、長軸2.1m、短軸1m、深さ38cmの細長い土坑である。埋土は黒褐色シルトの単層である。切り合いで、S D302より新しい。出土遺物は土師器小片1点である。

17号土坑（S K17, 第279図）

A 1 地区東側に位置する。平面形は楕円形で、長径1.42m、短径1m、深さ37cmである。埋土は黒褐色粘土質シルト・暗灰黄色砂・黒褐色砂質シルトを基調とし、3層に分かれて水平堆積する。切り合いで、S G51を切る。出土遺物は土師器小片2点である。

18号土坑（S K18, 第279図）

A 1 地区東側に位置する。平面形は楕円形で、長径74cm、短径44cm、深さは7cmと浅い。埋土は黒褐色粘土質シルトの単層である。切り合いでS D301より新しい。出土遺物はない。

33号土坑（S K33, 第279図）

A 1 地区東側に位置し、S K34に隣接する。平面形は円形で、直径26cm、深さ6cmである。埋土は黒褐色粘土の単層である。出土遺物は唐津小片1点である。

34号土坑（S K34, 第279図）

A 1 地区東側に位置し、S K33に隣接する。平面形は円形で、直径34cm、深さ6cmである。埋土は黒褐色粘土の単層である。出土遺物はない。

39号土坑（S K39, 第279図）

A 1 地区中央に位置し、S K40に隣接する。平面形は円形で、直径56cm、深さ12cmである。埋土は黒褐色粘土の単層である。出土遺物はない。

40号土坑（S K40, 第279図）

A 1 地区中央に位置し、S K39に隣接する。平面形は円形で、直径56cm、深さ30cmである。断面形は逆台形を呈する。埋土は黄褐色砂が混じる黒褐色粘土質シルトの単層である。出土遺物は伊万里小片1点である。

58号土坑（S K58, 第279図）

A 1 地区南東部に位置する。平面形は不整形で、長軸1.32m、短軸50cm、深さ17cmである。埋土は黒色砂質シルトの単層である。出土遺物はない。

65号土坑（S K65, 第279図）

A 1 地区中央北側に位置する。平面形は円形で、直径28cm、深さ8cmである。埋土は黒褐色砂質シルトの単層である。周辺には平面形が円形の小土坑が散在し、埋土の様相も同様である。出土遺物は唐津小片2点である。

74号土坑（S K74, 第280・284図、図版147）

A 1 地区東側に位置する。平面形は楕円形で、直径3.64m、短径1.64m、深さ28cmである。埋土は暗オリーブ褐色粘土質シルト・黒褐色粘土が水平堆積する。切り合いで、S K132を切る。出土遺物は土師器小片1点、越中瀬戸1点（79）である。79は越中瀬戸の壺である。口径14.0cmで、内外面に鉄輪を施す。

132号土坑（S K132, 第280図）

A 1 地区東側北端に位置する。平面形は不整形で、長軸4.42m、短軸1.12m、深さ10cmの細長く浅い落ち込み状の土坑である。埋土は黒褐色粘土の単層である。切り合いで、S K74・S K193に切

られる。出土遺物はない。

192号土坑（S K192, 第280図）

A 1 地区東側北端に位置し、S K132に隣接する。平面形は不整形で、深さ24cmである。北側は調査区外に延びる。埋土は黒褐色粘土を基調とする。出土遺物は唐津小片1点である。

193号土坑（S K193, 第280図）

A 1 地区東側北端に位置する。平面形は不整形で、長軸1.76m、短軸1.38m、深さ10cmの浅い落ち込み状の土坑である。埋土は黒褐色粘土の単層。切り合いでS K132を切る。出土遺物はない。

305号土坑（S K305, 第280図）

A 2 地区西側に位置する。平面形は円形で、直径98cm、深さ32cmである。断面形は逆台形を呈し、埋土は灰黄褐色砂質シルト・褐灰色粘土質シルトの水平堆積である。切り合いでS D302を切る。出土遺物はない。

310号土坑（S K310, 第280図）

A 2 地区西側北端に位置する。平面形は不整形で、長軸76cm、短軸40cm、深さ6cmの浅い落ち込み状の土坑である。埋土は灰黄褐色砂質シルトの単層である。切り合いでS D308を切る。出土遺物はない。

319号土坑（S K319, 第280図）

A 2 地区中央北側に位置する。平面形は楕円形で、長径1.44m、短径86cm、深さ16cmの浅い落ち込み状の土坑である。底面は平坦ではなく、埋土は褐灰色粘土質シルト・にぶい黄褐色砂を基調とする。出土遺物はない。

332号土坑（S K332, 第280図）

A 2 地区中央に位置する。平面形は円形で、直径90cm、深さ35cmである。断面形は逆台形を呈する。埋土は水平堆積で、灰黄褐色粘土質シルト・褐灰色粘土質シルトを基調とし、それぞれに地山のにぶい黄褐色砂が混じる。出土遺物はない。

342号土坑（S K342, 第280図）

A 2 地区中央に位置する。平面形は不整形で、長軸1.18m、短軸78cm、深さ14cmの浅い落ち込み状の土坑である。埋土は水平堆積で、黒褐色粘土質シルト・灰黄褐色粘土質シルトを基調とし、それぞれブロック土が混じる。出土遺物はない。

352号土坑（S K352, 第280図）

A 2 地区中央に位置する。平面形は楕円形で、長径1.96m、短径1.28m、深さ13cmの浅い落ち込み状の土坑である。埋土は黒褐色粘土・褐灰色シルトの水平堆積である。出土遺物はない。（泉 英樹）

512号土坑（S K512, 第281・284図、図版147）

B 1 地区南西部に位置する。平面形は楕円形で、長径80cm、短径64cm、深さ20cmである。埋土は暗灰黄色粘土の単層である。遺物は内外面に鉄粧が施された越中瀬戸壺の口縁部片1点（80）が出土している。

525号土坑（S K525, 第273図）

B 1 地区南西部に位置する。平面形は楕円形で、長軸3.44m、短軸3.2m、深さ22cmである。埋土は主に黒褐色粘土であり、下層は暗灰黄色粘土である。S D518に切られる。出土遺物はない。

609号土坑（S K609, 第281図、図版141）

B 2 地区南西部に位置する。平面形は楕円形で、長径1.92m、短径1.58m、深さ55cmである。埋土

は暗灰黄色粘土、黒褐色粘土、黄灰色粘土などがレンズ状に堆積する。S D602を切るが、上層部分の埋土の切り合いで不明瞭であることから、最終的な埋没時期がほぼ同時であった可能性がある。遺物は越中瀬戸搔鉢の体部片1点が出土している。

611号土坑（S K611, 第281図）

B2地区の南部、S D602とS D612の間に位置する。平面形は楕円形で、長径2.36m、短径1.56m、深さ80cmである。上層から褐色砂質シルト、暗灰黄色粘土、黒褐色粘土、オリーブ褐色粘土質シルトを基調とする埋土がレンズ状に堆積している。出土遺物はない。

627号土坑（S K627, 第281図、図版141）

B2地区南東部に位置する。遺構の東側が調査区外に広がるため平面形は不明だが、残存部の形状から楕円もしくは円形と考えられる。調査区内での規模は長径2.3m、短径1.14m、深さ1.24mを測る。埋土は主に黒褐色粘土、オリーブ黒色砂質シルト、暗灰黄色粘土、灰色砂などからなる。出土遺物はない。

709号土坑（S K709, 第282図）

C地区南側に位置する。平面形は円形で、直径1m、深さ20cmを測る。埋土は上層が褐色粘土質シルト、下層は黒褐色粘土質シルトをそれぞれ基調とする。出土遺物はない。

726号土坑（S K726, 第262・263図）

C地区北側に位置する。平面形は不整形で、長軸2.84m、短軸1.46m、深さ9cmを測る。埋土は褐色砂質シルトの単層である。S G722を切る。出土遺物はない。

729号土坑（S K729, 第282図）

C地区北側に位置する。平面形は楕円形で、長径72cm、短径56cm、深さ26cmを測る。埋土は上層が褐色粘土、下層は灰黃褐色砂質シルトをそれぞれ基調とする。出土遺物はない。

735号土坑（S K735, 第282図）

C地区北側の東端に位置する。遺構の東側は調査区外に広がるため平面形は不明。調査区内での規模は長軸6.9m、短軸3.86m、深さ60cmを測る。埋土は上層が黒褐色粘土質シルト、下層は黄灰色粘土をそれぞれ基調とする。

遺物は弥生土器の壺の口縁部片2点・体部片5点、須恵器杯の体部片1点が出土している。土坑としたが、埋土種類・堆積状況の共通性や出土遺物から、弥生時代の自然流路S D501の一部である可能性もある。

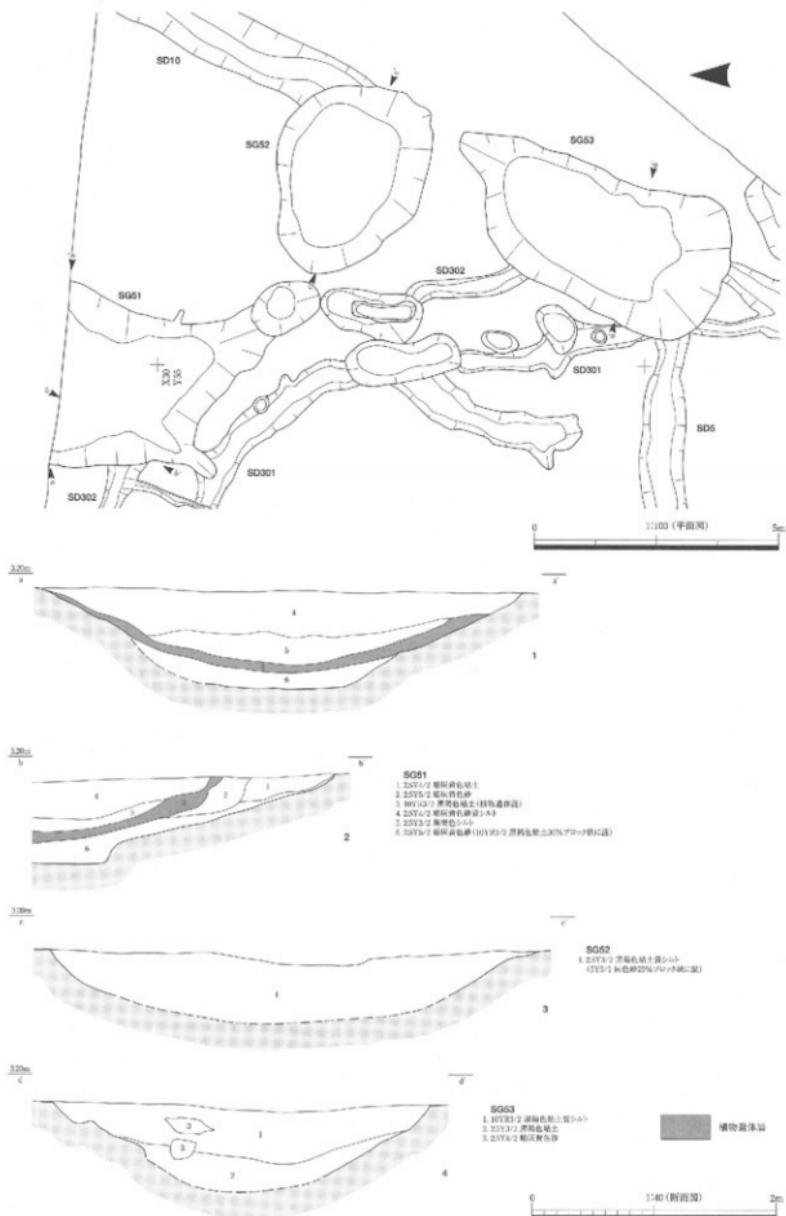
736号土坑（S K736, 第264・265図、図版139）

C地区北側に位置する。平面形は楕円形で、長径4m、短径1.8m、深さ67cmを測る。S G728を切る。S G728との切り合いで上層・下層で異なっていることから、一度埋没した（旧S K736）のちに上層部分が再掘削されたもの（新S K736）と考える。埋土は旧S K736の上層が褐色粘土、下層は黄灰色粘土質シルトであり、新S K736の上層は灰黃褐色粘土質シルトがブロック状に混じる褐色粘土質シルト、下層は植物遺体を多量に含んだ2~4cm幅の黒褐色粘土層で滲水性の自然堆積であると考えられる。遺物は珠淵壺の体部片（底部片）1点が出土している。

737号土坑（S K737, 第282図）

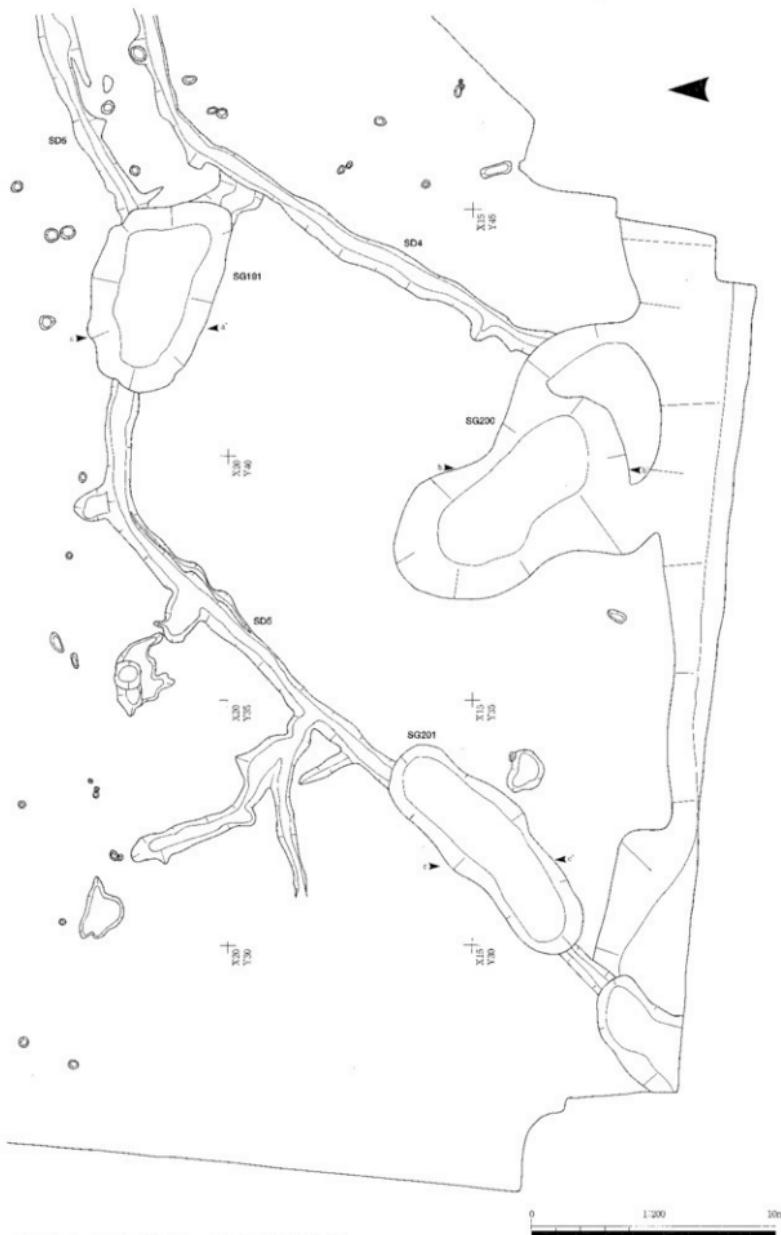
C地区北側に位置する。平面形は円形で、直径60cm、深さ16cmを測る。S D738を切る。埋土は単層で黒褐色粘土質シルトを基調とする。出土遺物はない。

(朝田 勉)

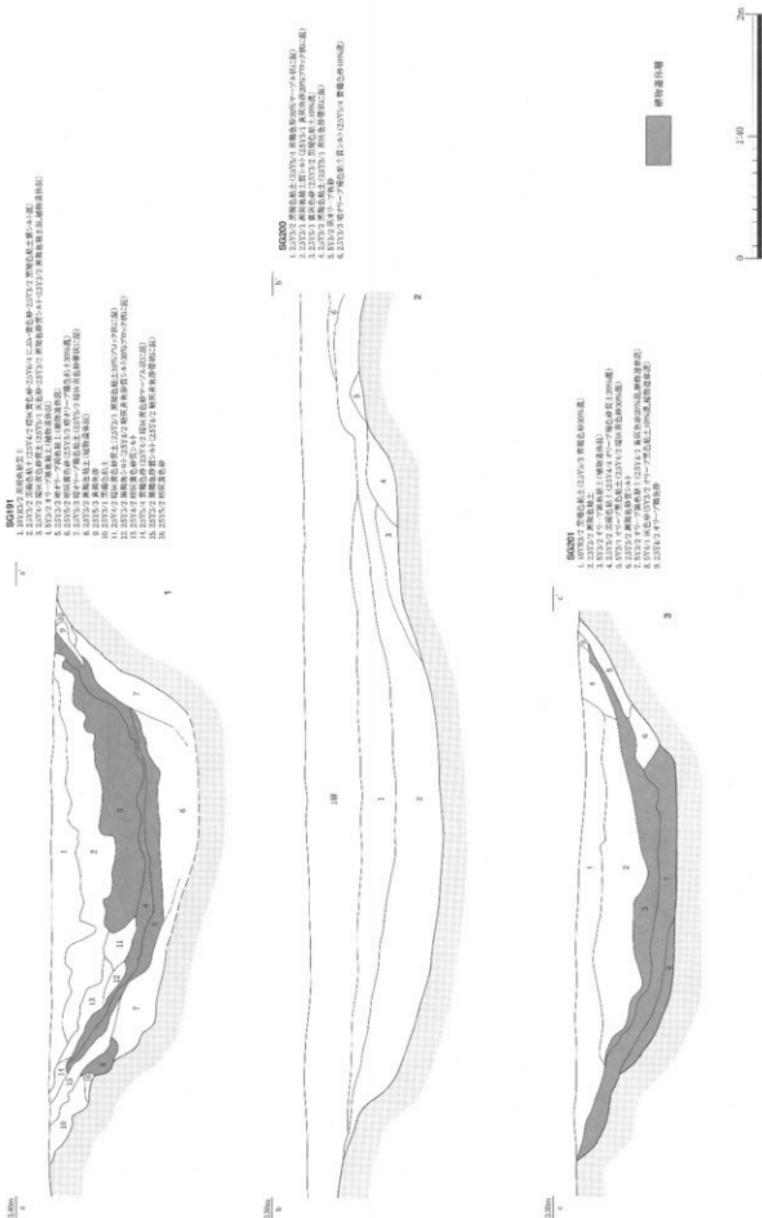


第249図 大野江洞遺跡 中近世遺構実測図

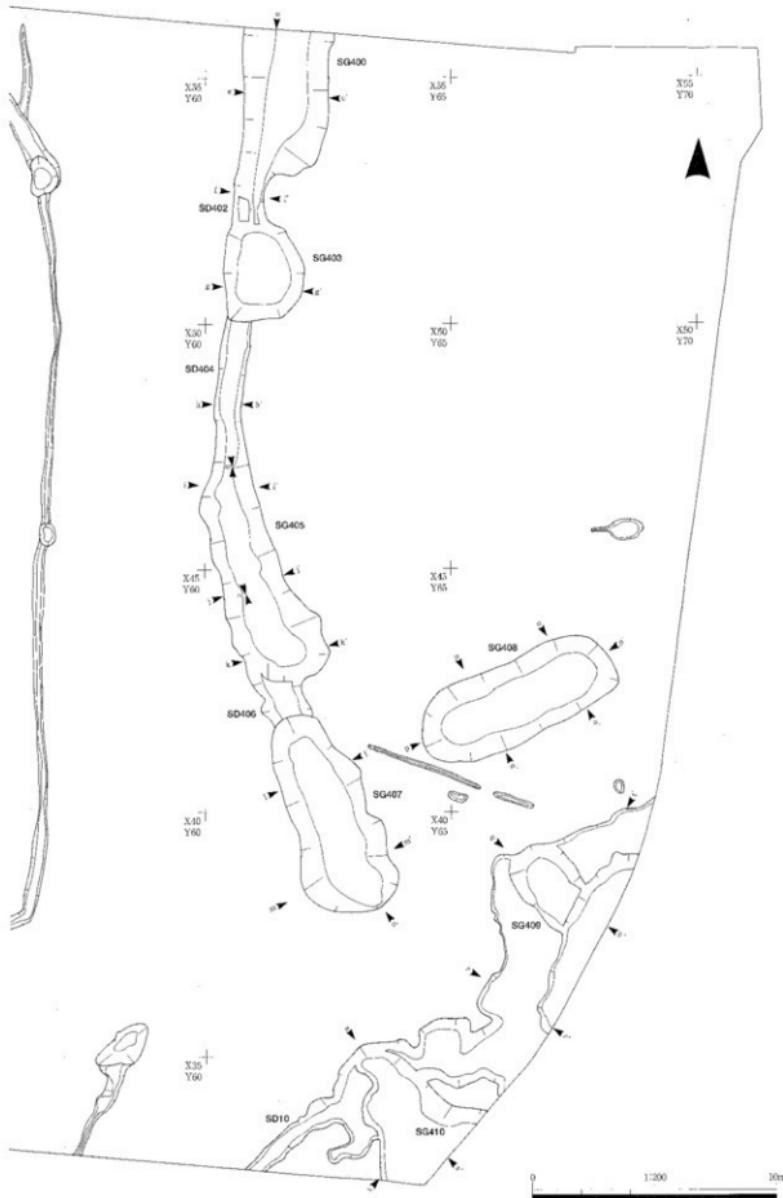
1・2. SG51 3. SG52 4. SG53



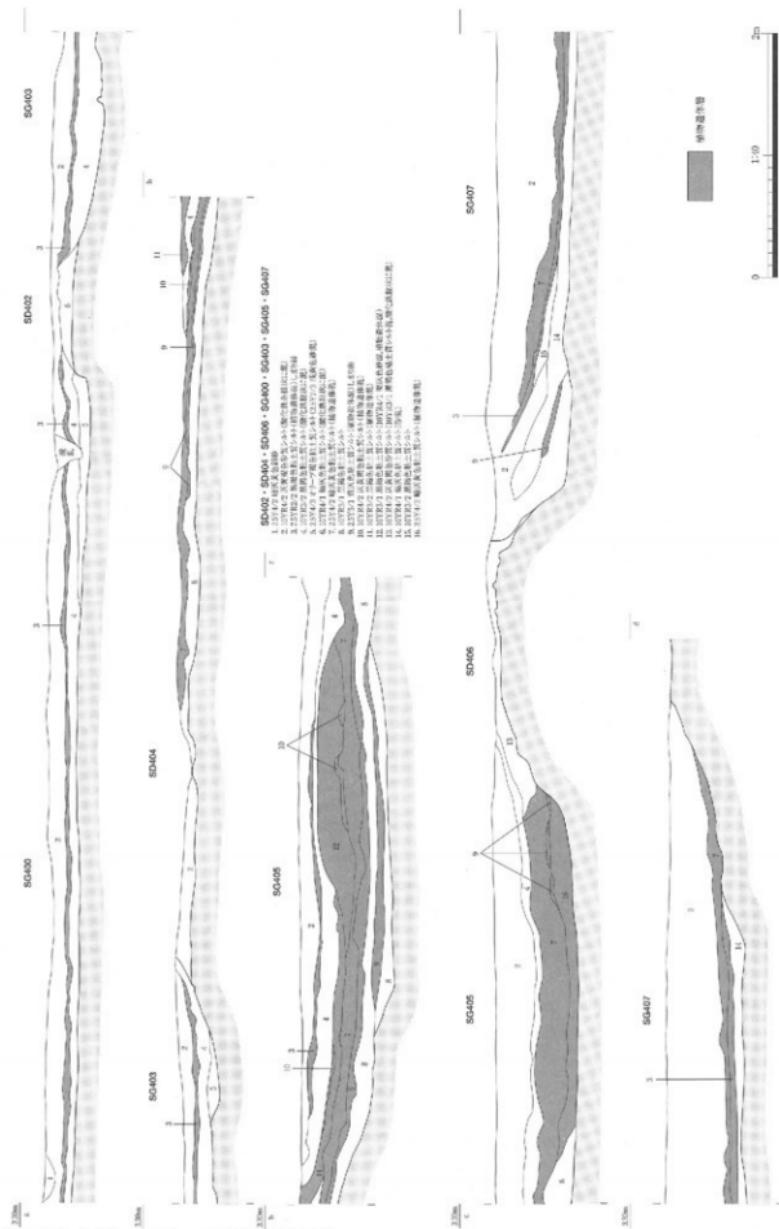
第250図 大野江洞遺跡 中近世遺構実測図
SG191・SG200・SG201



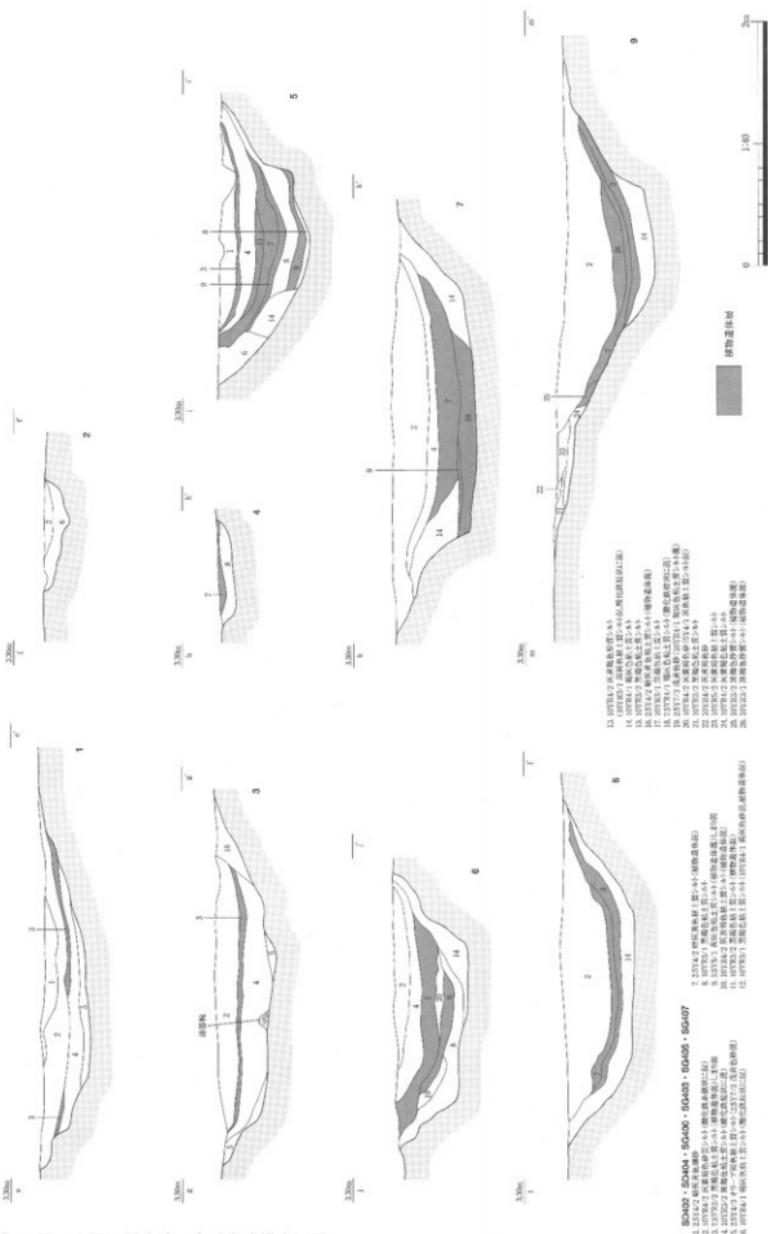
第251図 大野江淵遺跡 中近世遺構実測図
1. SG191 2. SG200 3. SG201



第252図 大野江淵遺跡 中近世遺構実測図
SD402・SD404・SD406・SG400・SG403・SG405・SG407～SG410



第253図 大野江洞遺跡 中近世遺構実測図
SD402・SD404・SD406・SG400・SG403・SG405・SG407

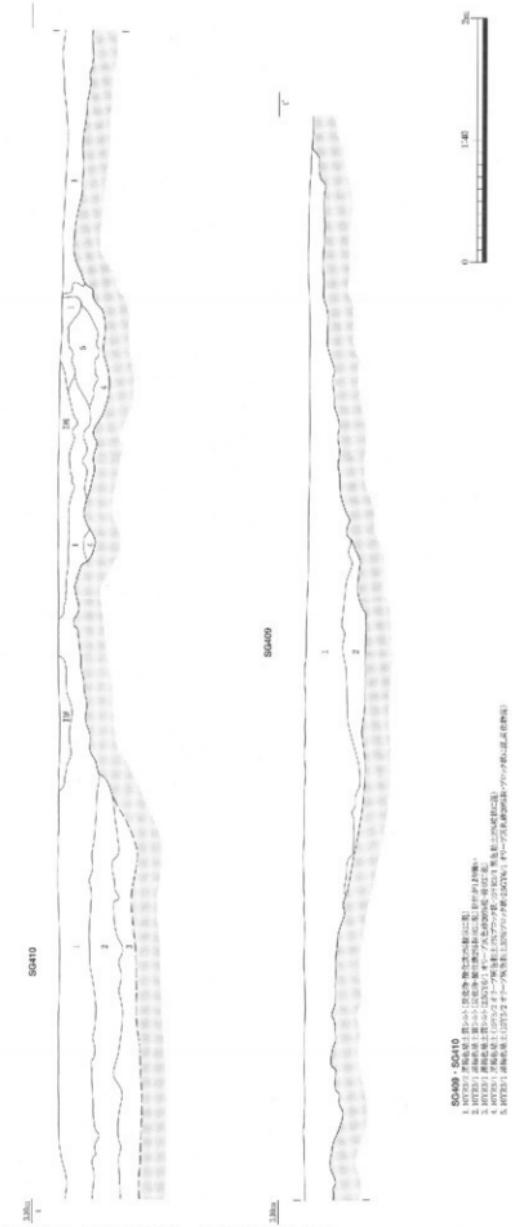


第254図 大野江淵遺跡　由近世遺構実測図

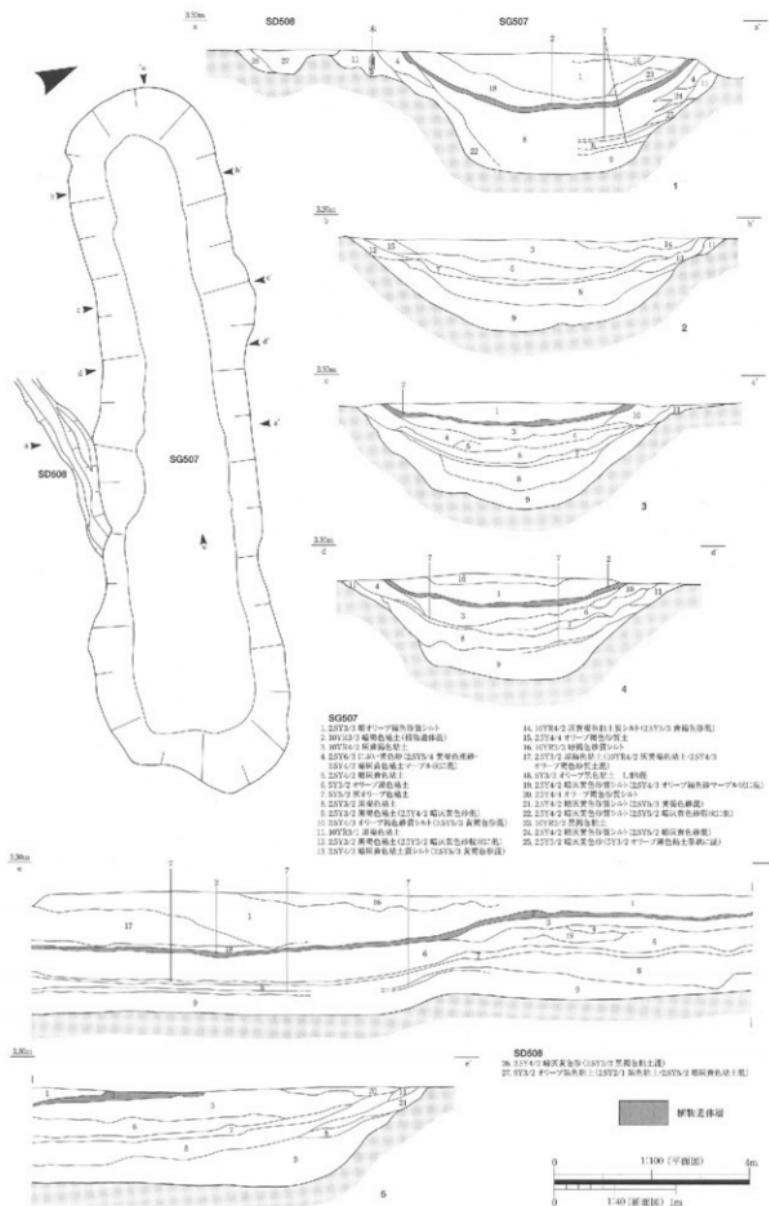
1 SG400 2 SD402 3 SG403 4 SD404 5~7 SG405 8~9 SG407



第255図 大野江洞遺跡 中近世遺構実測図
1~3. SG408 4·5. SG409 6. SG410

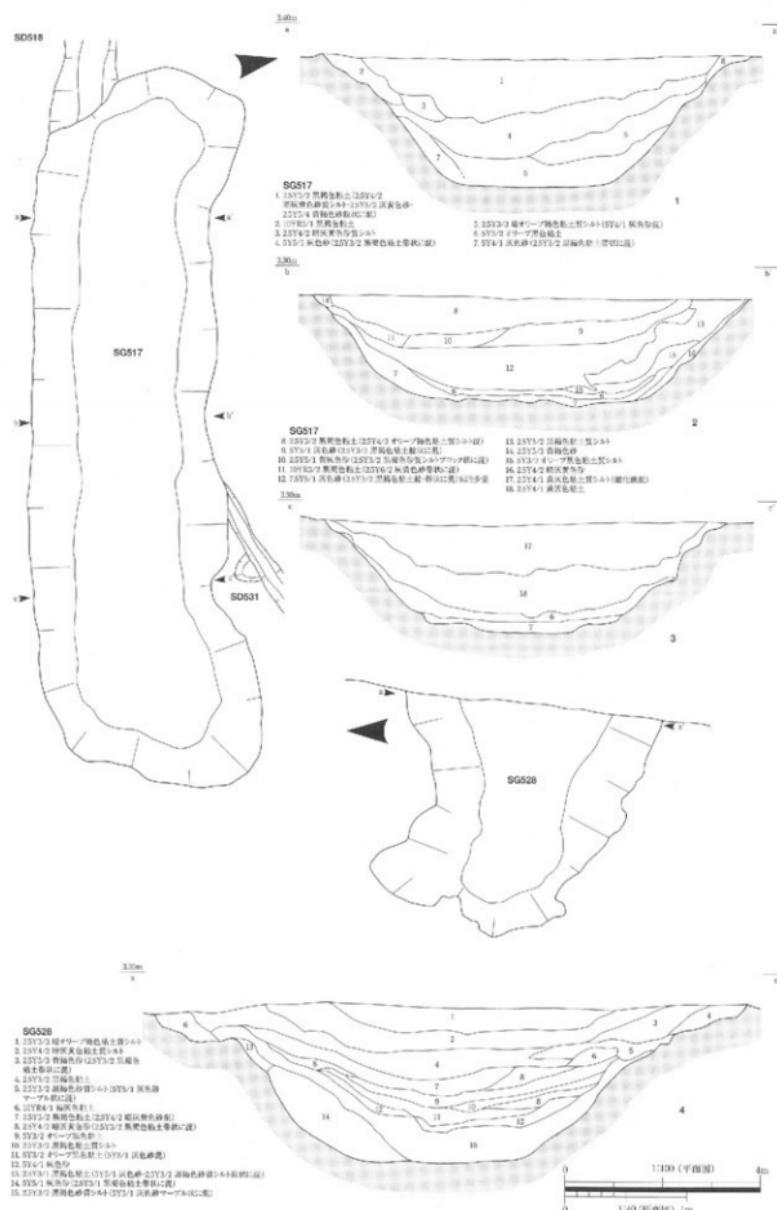


第256図 大野江瀬遺跡 中近世造構実測図
SG409・SG410

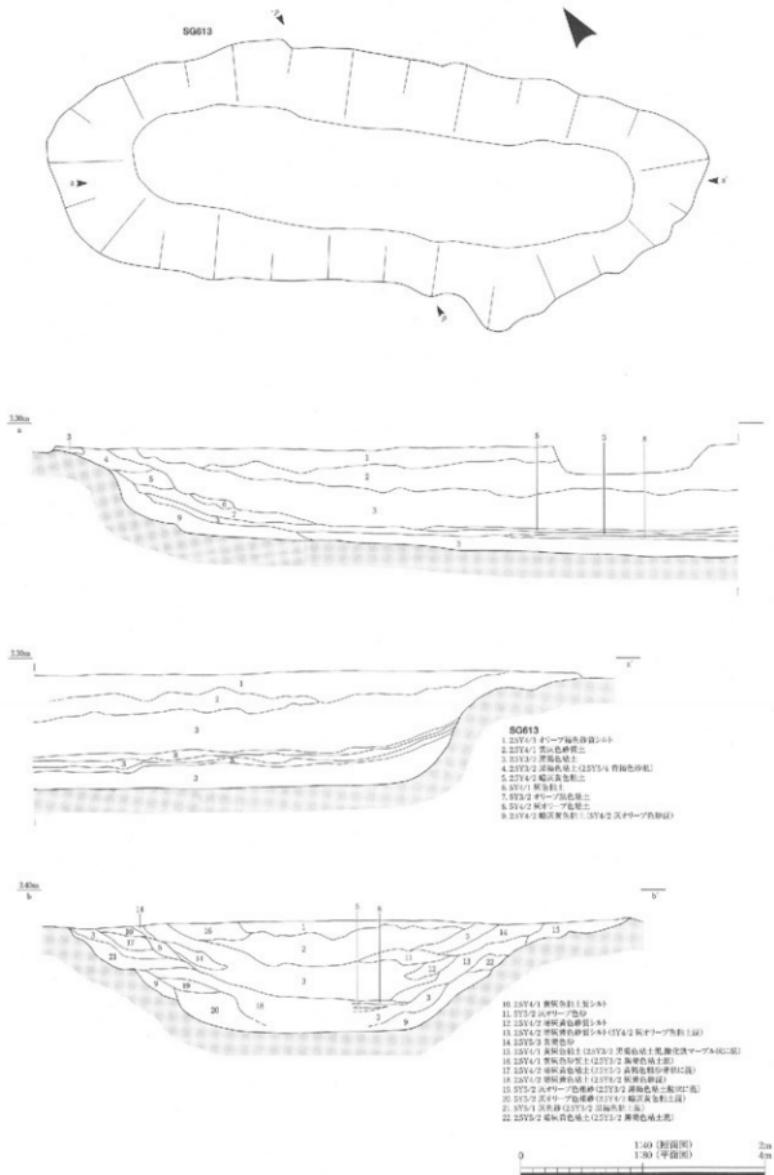


第257図 大野江遺跡 中近世遺構実測図

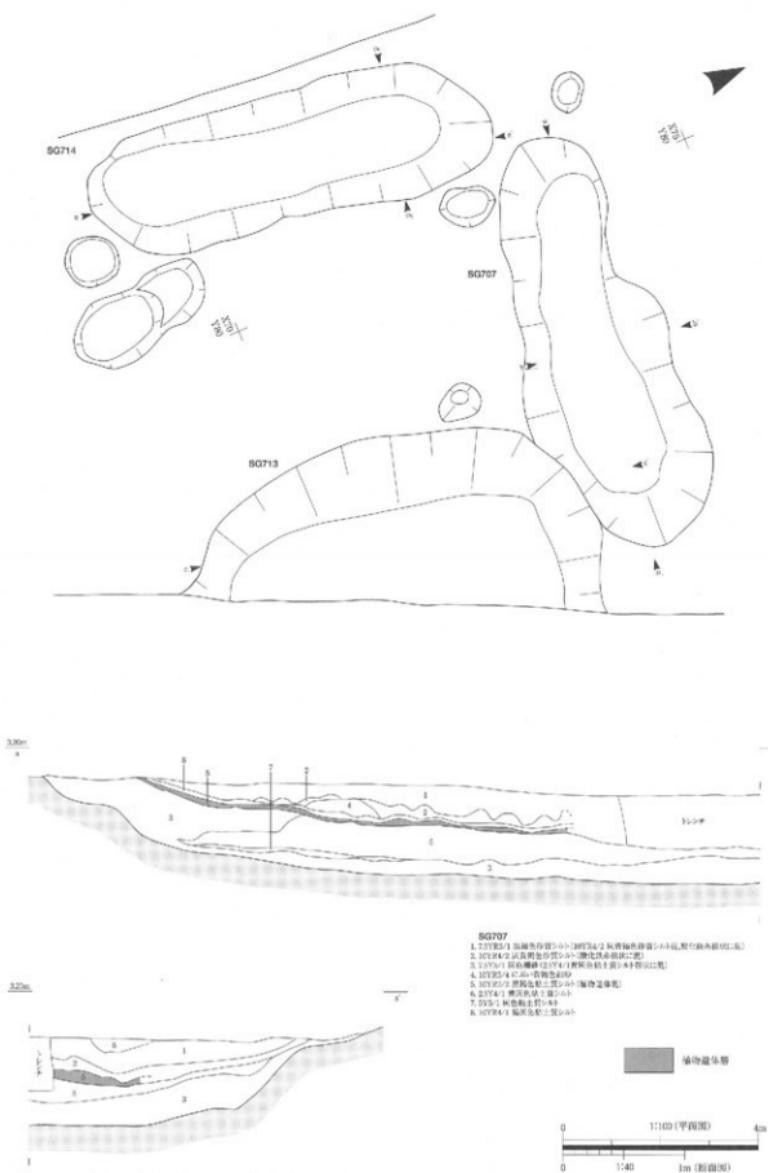
1. SD508・SG507 2~5. SG507



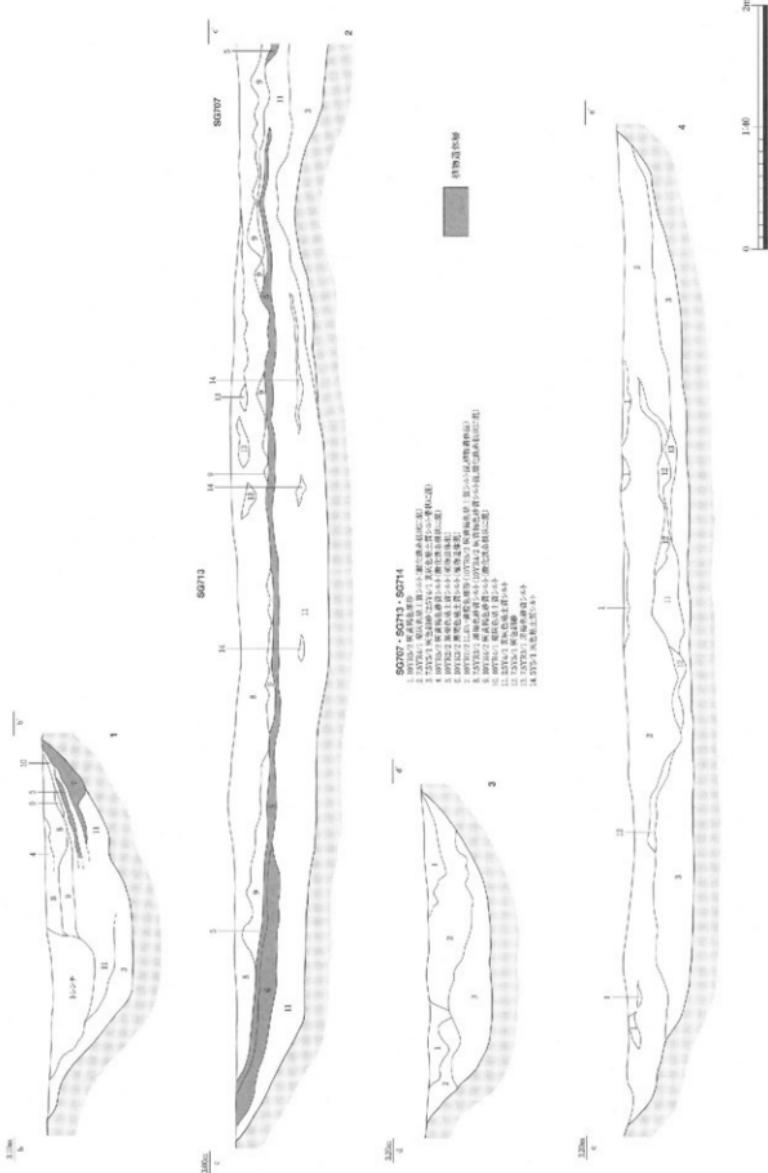
第258図 大野江瀬遺跡 中世遺構実測図
1~3. SG517 4. SG528



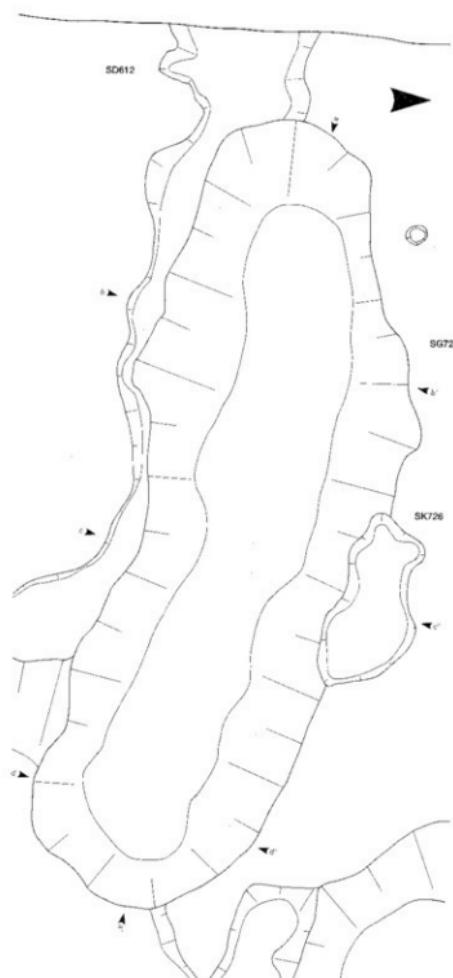
第259図 大野江洞遺跡 中近世遺構実測図
SG613



第260図 大野江洞遺跡 中近世遺構実測図
SG707・SG713・SG714

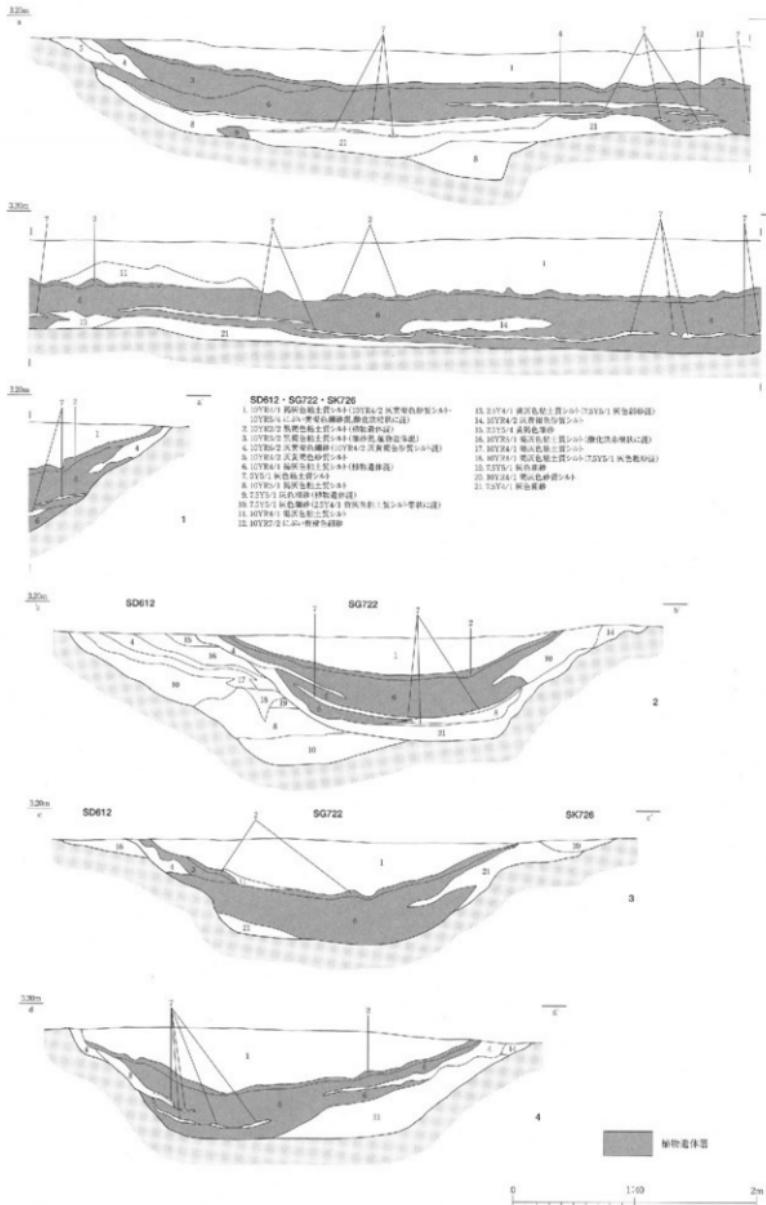


第261図 大野江淵遺跡 中近世遺構実測図
1. SG707 2. SG707・SG713 3・4. SG714



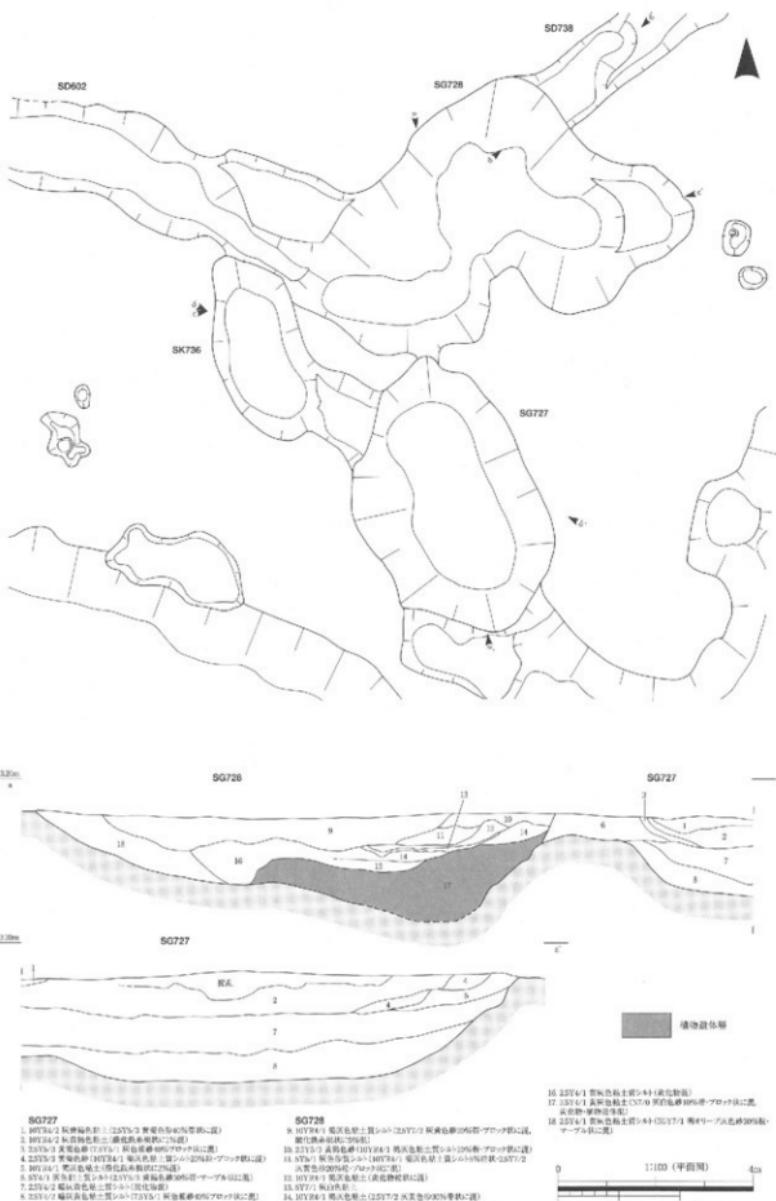
0 120 400

第262図 大野江淵遺跡 中近世遺構実測図
SD612・SG722・SK726



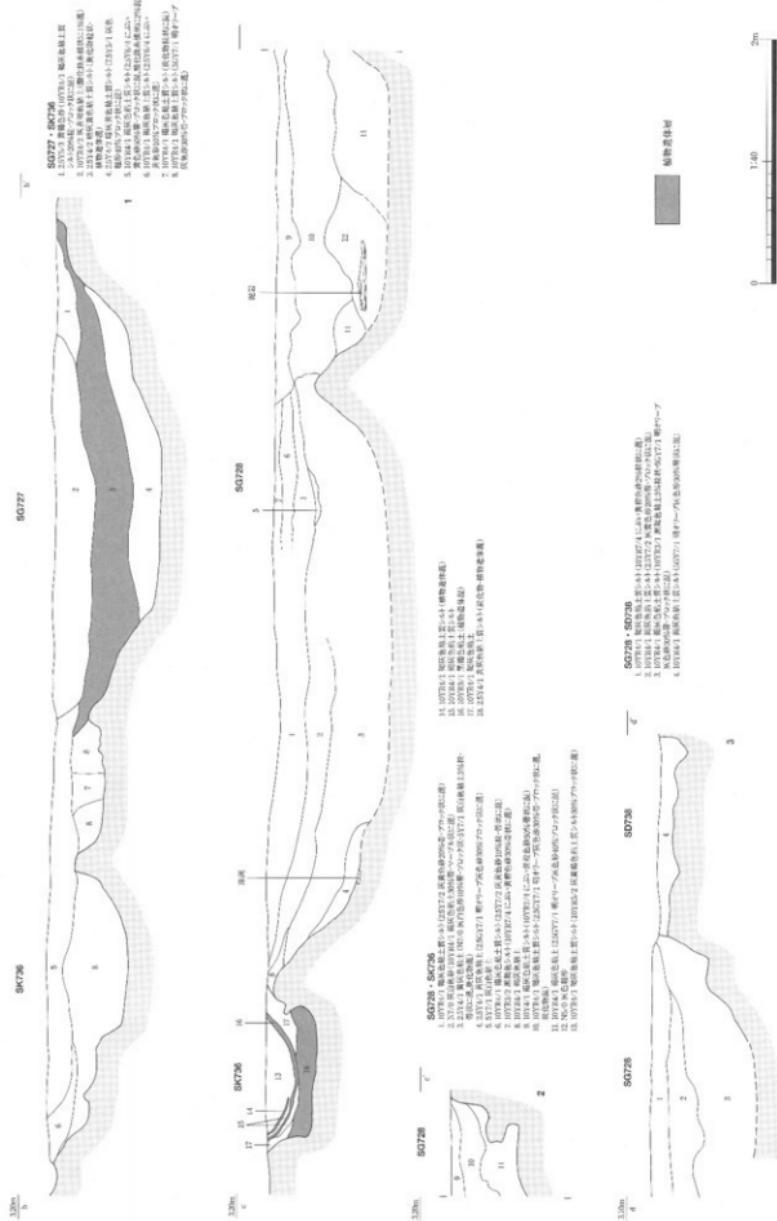
第263図 大野江洞遺跡 中近世遺構実測図

1. SG722 2. SD612・SG722 3. SD612・SG722・SK726 4. SG722



第264図 土野江淵遺跡 中近世遺構実測図

大野江瀬遺跡 中近世遺構測量図
SD602・SD638・SC737・SC738・SK736

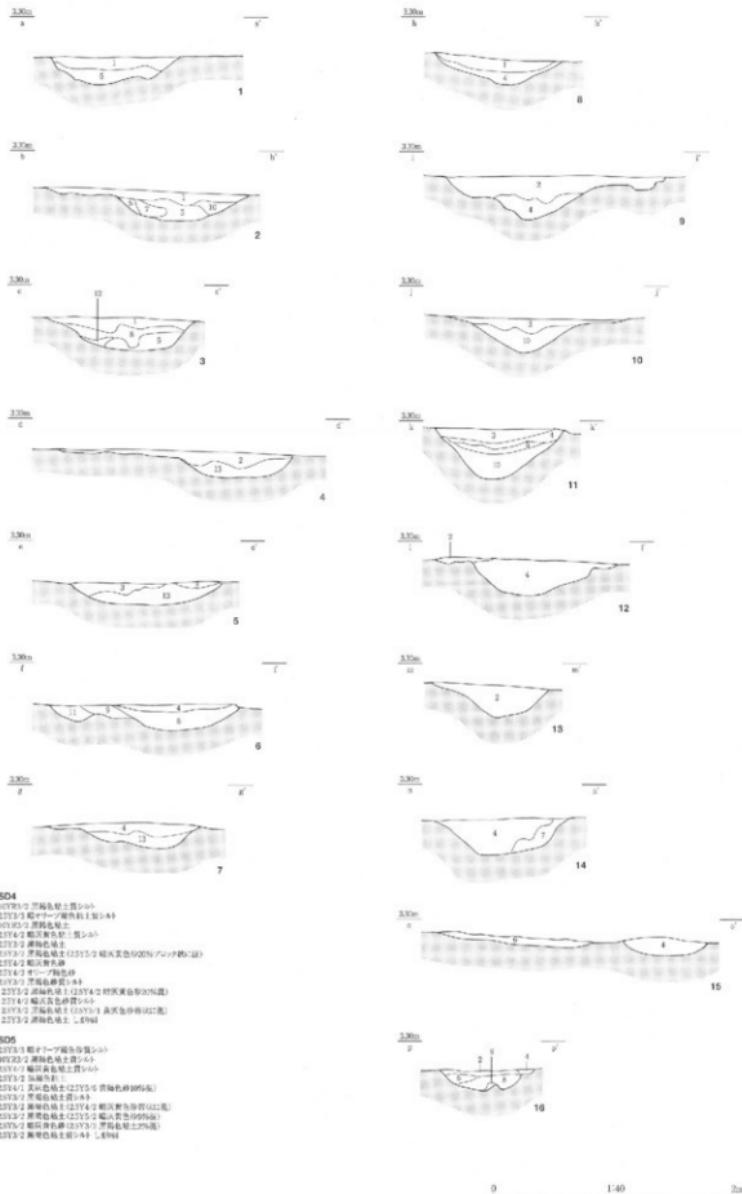


第265図 大野江淵遺跡 中近世遺構実測図

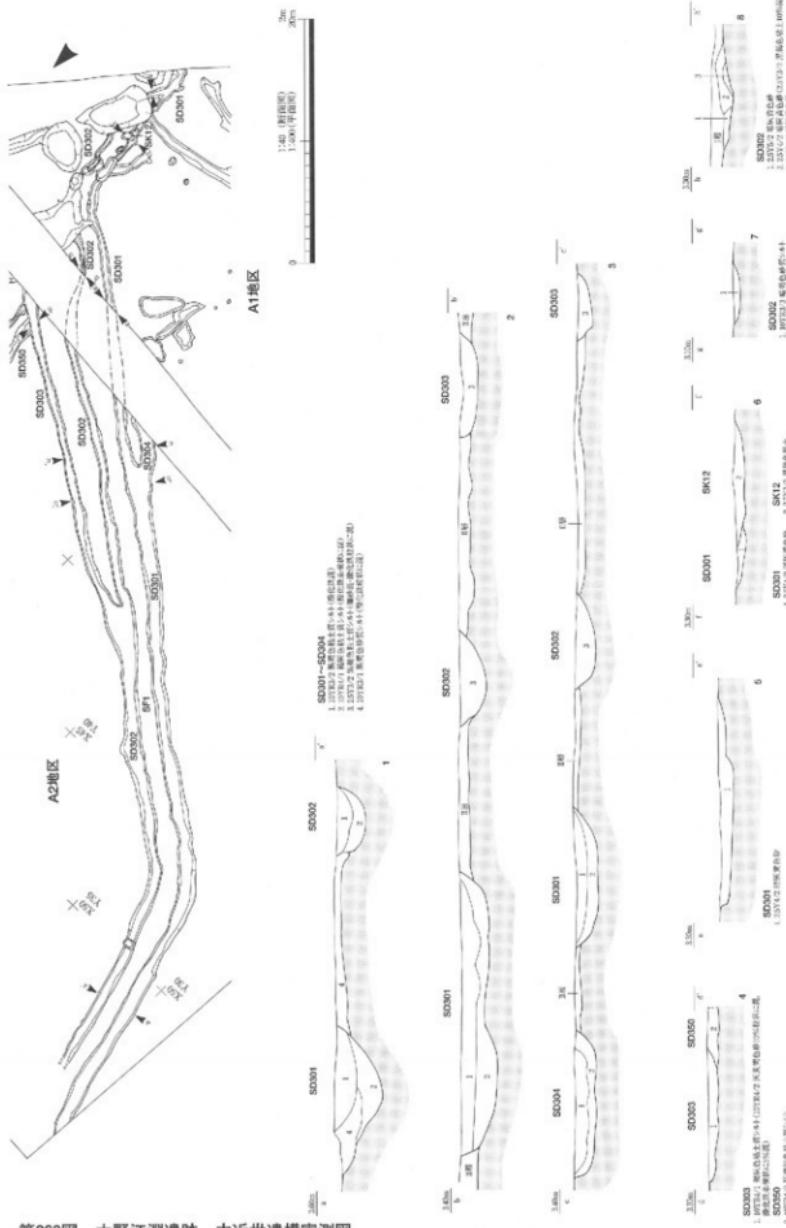
1. SG727 · SK736 2. SG728 · SK736 3. SD738 · SG728



第266図 大野江淵遺跡 中近世遺構実測図
SD4・SD5



第267図 大野江洞遺跡 中近世遺構実測図
1~7. SD4 8~16. SD5

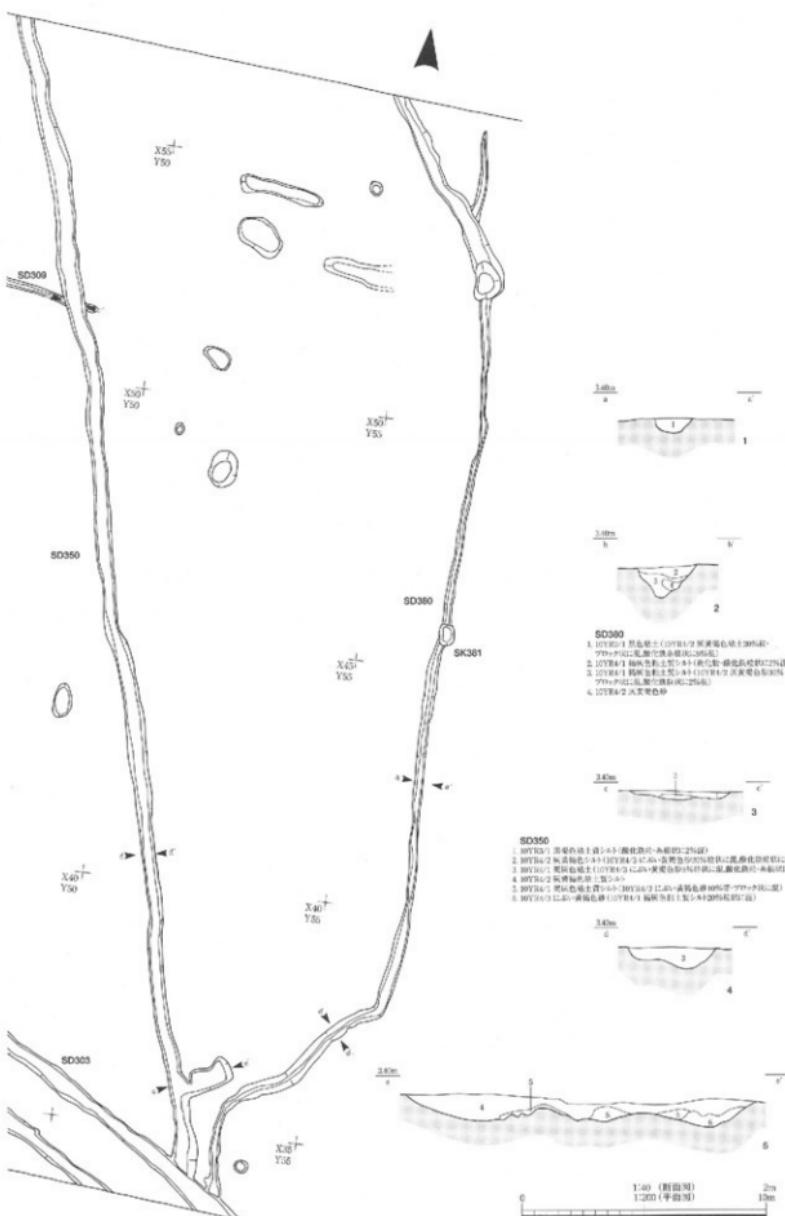


第268図 大野江淵遺跡 中近世遺構実測図

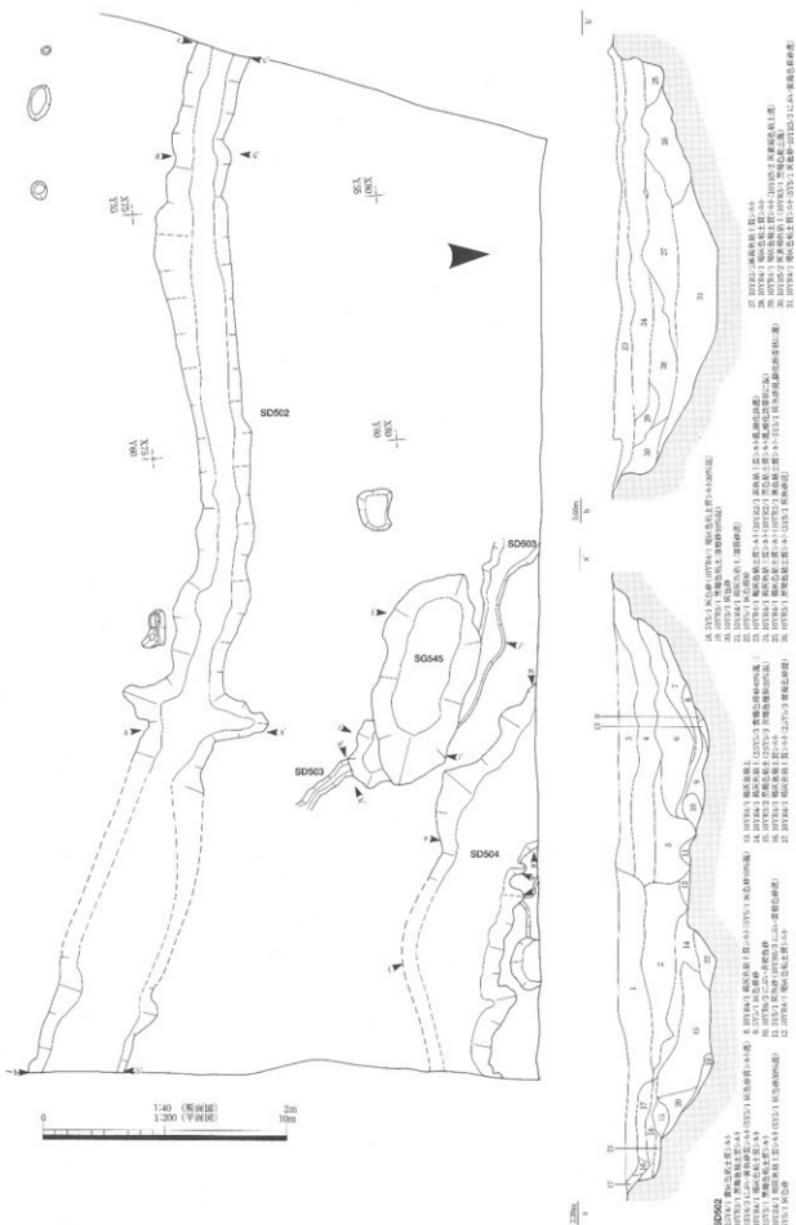
1. SD301~SD302 2. SD301~SD303 3. SD301~SD304 4. SD303~SD350
5. SD301~SD302 6. SD301~SK12 7. 8. SD302



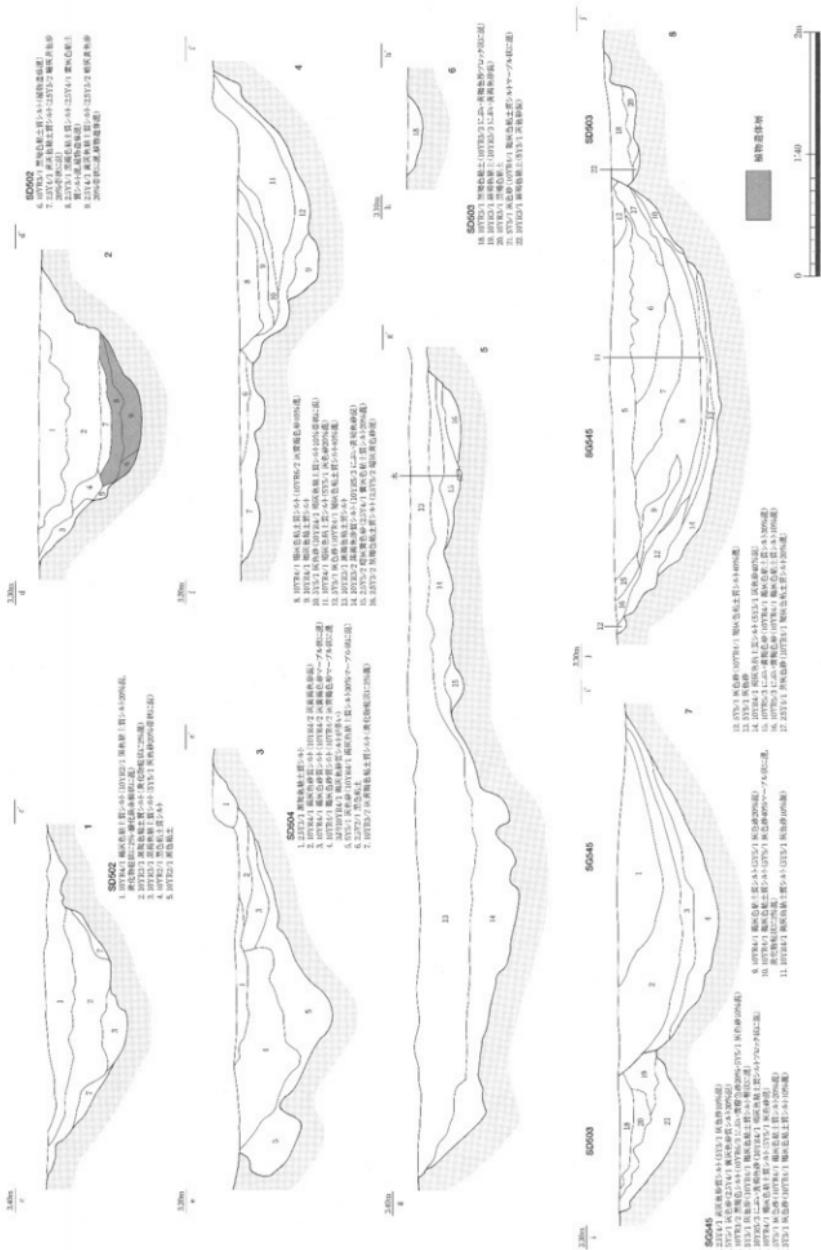
第269図 大野江洞遺跡 中近世造構実測図
1. SD308 2・3. SD309



第270図 大野江淵遺跡 中近世遺構実測図
1・2. SD380 3~5. SD350

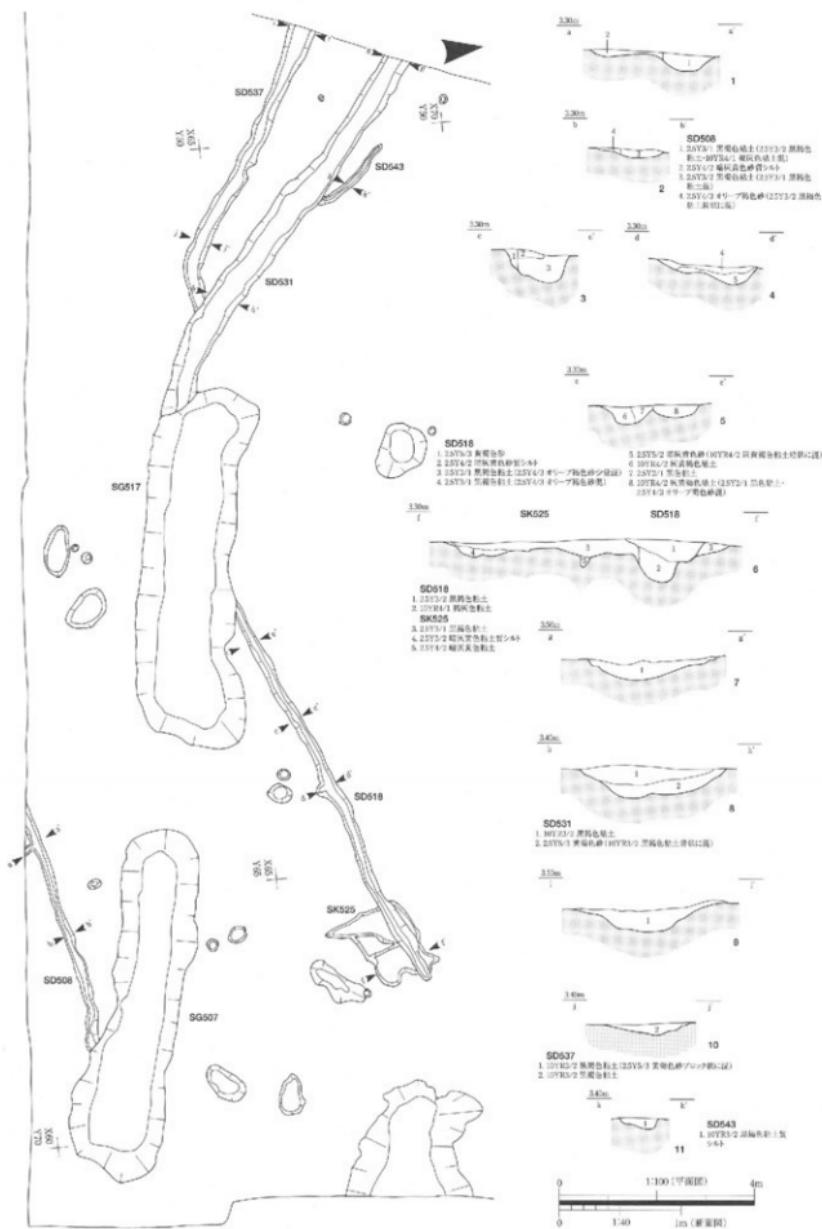


第271図 大野江淵遺跡 中近世遺構実測図
SD502～SD504・SG545



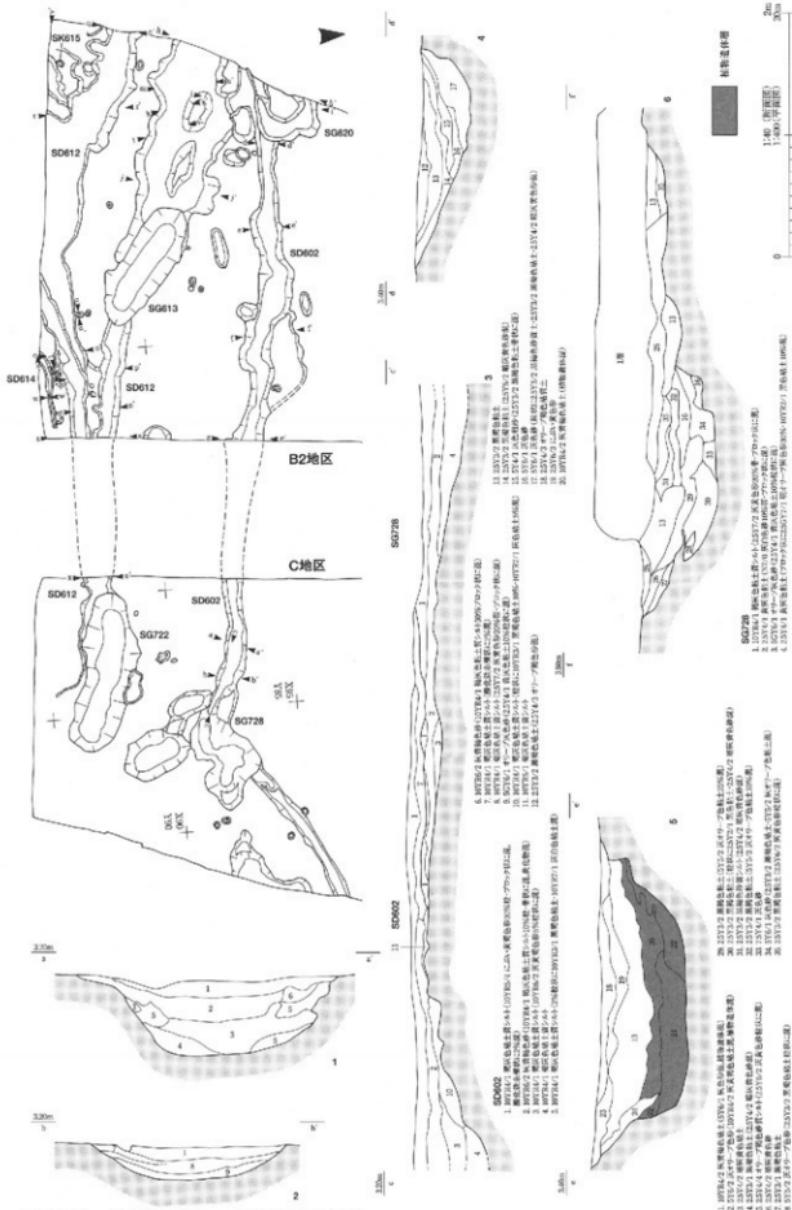
第272図 大野江瀬遺跡 中近世造構実測図

1・2. SD502 3~5. SD504 6. SD503 7・8. SD503・SG545



第273図 大野江洞遺跡 中近世遺構実測図

1・2. SD508 3~5. SD518 6. SD518・SK525 7・8. SD531 9・10. SD537 11. SD543



第274図 大野江洞遺跡 中近世遺構実測図

SD602 · SD612 · SD614 · SG613 · SG620 · SG722 · SG728 · SK615
1 · 2 · SD602 · 3 · SD602 · SG728 · 4 · 6 · SD602



第275図 大野江洞遺跡 中近世遺構実測図
1. SD602 2・3. SD602・SD612・SG620